

新潟市授業づくりサポート

ver. 2



二次元コードから、新潟市の目指す授業づくりが分かる10分間の動画を視聴できます。
この動画は各学校園の全教職員の授業改善をサポートするために作成されました。
二次元コードをタップすることで視聴できますので、ぜひご覧ください。

令和6年度3月作成

新潟市教育委員会

新潟市の教職員の皆様へ

子どもたちの多様化や教職員の有り様も多様化してきています。これまで新潟市の先生方が大切にしてきた教職員の基本的な姿勢や子どもたちとの関わりについて、年齢や経験年数を問わず、これからも大切に指導にあたる内容について共有したいと考えています。そのことで、今後も全ての子どもたちが「先生方や仲間達と学び、過ごす学校が楽しい」と思える学校園の創造を切に願っています。

また、学習指導要領の告示から7年が経過しました。「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善を、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」により、更に推進することが求められています。教職員や学校園が、それぞれの実態に応じて授業を改善する手がかりとして、市教委の考えを提示します。

献身的で温かく、子どもを愛してやまない先生方が、この「授業づくりサポート」に目を通していただき、個人やチームで確認したり、考えたりするよりどころや、原点回帰のきっかけになれば幸いです。

新潟市が目指す教育

(1) 新潟市が目指す子どもの姿

人とかかわることを通し、
自ら判断・決定し、
夢や目標の実現に向かう姿

(2) 新潟市が目指す学校教育

「多様性」を前提とし、
全ての子どもたちの
「自分らしさ」が発揮され、
「可能性を引き出す」教育

新潟市が目指す授業のあり方

(1) 「可能性を引き出す」指導・支援の視点

これまでは、社会の要請により左側「これからも」が重視される傾向があり、過去には成果を上げることもありました。

社会も変化し、日々の授業や学校全体で、右側「これからは」の重要性が強調され、新潟市でもそれらを意識して学校教育を展開していきます。

これからも

先生主導

先生が決める

先生が教える

先生が評価

教師-児童生徒 中心

一斉一律 (同じことを同じペースで)

正解は一つ

よいか悪いか

画一的 (みんなが同じ姿)

失敗させない

Must/Should

これからは

子ども主導

子どもに委ねる

子どもが学び取る

子どもが評価

児童生徒-児童生徒 中心

個別化・個性化

正解はない

最適解・納得解

多様性 (みんなが違っていい)

Try and Error

May/Can

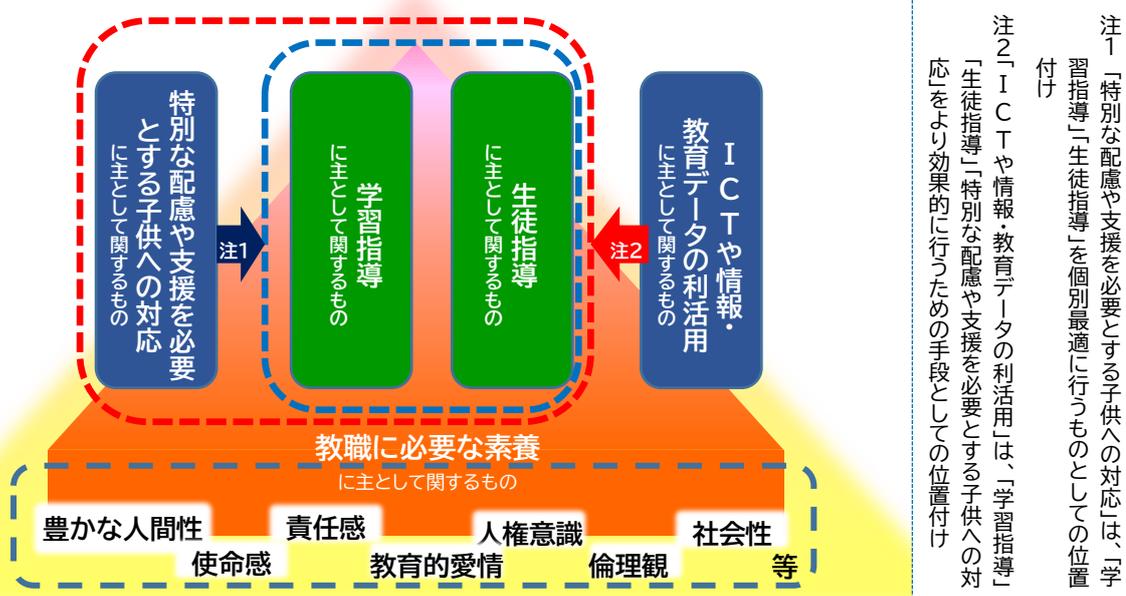
二項対立ではなく、目指す子どもの姿に願いを込めて「これからも」も大切にしながら、「これからは」の視点で、私たち教師が全ての子どもたちの可能性を引き出すために、柔軟で多様な指導方法で授業を展開していくことが大切です。

目次

I	教師の基本的な構え	1
II	信頼関係の構築のために	
1	児童生徒理解と信頼関係	2
2	子どもと関わる際に大切にしたいこと	4
3	信頼関係を築く「ほめる・認める（叱る）」	6
III	全ての子どもたちの成長を促すために	
1	生徒指導の目的	10
2	授業づくりと生徒指導の一体化	11
3	集団づくりの視点～支持的風土の醸成～	16
IV	全ての子どもたちの学びの保障に向けて	
1	UD（ユニバーサルデザイン）の視点	22
2	日々の授業での教授行動・授業技術	27
V	授業改善の視点	
1	主体的・対話的で深い学び	34
2	単元デザイン	35
3	授業づくりの要件	37
4	確かな学びの5つの要素	38
5	個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実	42
VI	情報活用能力の育成	
1	情報活用能力を育成する基本的な考え方	46
2	育成を目指す情報活用能力とは	47
3	情報活用能力を発揮しながら学ぶ自立した学習者のイメージ	48
4	情報モラルを高めている学習者のイメージ	49
5	情報スキル・プログラミング能力目標体系表	50
※	指導案の書き方	51

～国の参酌資料～

令和4年8月、国は教師に求められる資質能力について、指針に基づく具体的内容を定め、(1) 教職に必要な素養、(2) 学習指導、(3) 生徒指導、(4) 特別な配慮や支援を必要とする子供への対応、(5) ICTや情報・教育データの利活用の5つに構造的に整理しました。(下図)



※ 上記に関連して、マネジメント、コミュニケーション(ファシリテーションの作用を含む)、連携協働などが横断的な要素として存在

1 教師の基本的な構え

私たちは、一人一人の違いを前提に、全ての子どもたちが「自分らしさ」を
発揮して学んだり経験したりすることを通し、その子の可能性を引き出され、
成長できるような指導・支援を目指します。

そして、配慮が必要な子どもを含めた全ての子どもたちが、「分かる・でき
る」授業づくりを目指します。 その際、子どもとの信頼関係は欠かせないもの
です。

では、信頼関係が構築されると、子どもはどのような思いをもつでしょうか。
「先生は私たちのことを大事にしてくれている。私たちを成長させようとしてくれている。」

「先生の授業や学級は安心感がある。」

「困ったら先生に相談できる。」

「真剣に耳を傾けたり叱ってくれたりして、私たちを守ってくれる。」

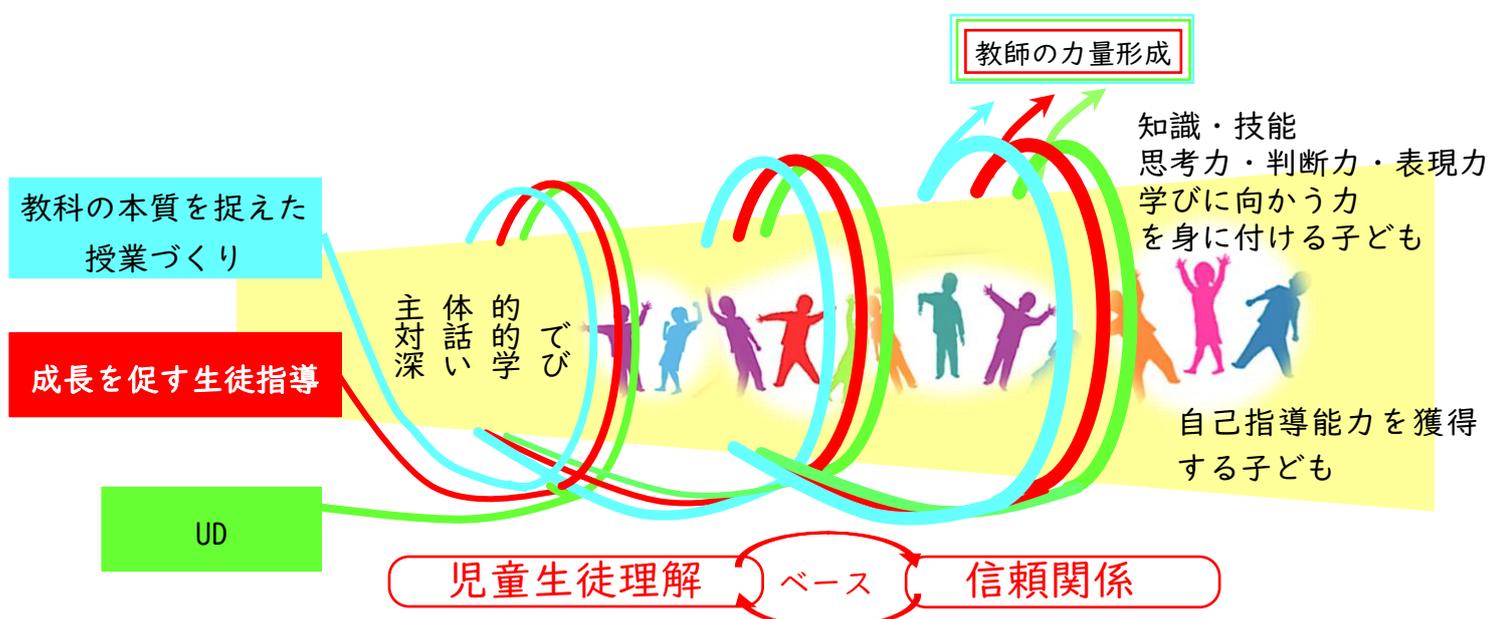
「先生と一緒にいろいろなことがしたい。」

「先生は一生懸命だ。」

「分かる・できるようになる授業をしてくれる。」

一方、子どもがこのようになるには、教師の思いだけではなかなか至りません。

授業づくりや子どもたちとのかかわりに、生徒指導やユニバーサルデザインの視点を内在化させ、児童生徒理解に基づく信頼関係を構築していくこととともに「主体的・対話的で深い学び」を実現していくことが大切です。これまでも新潟市で大切にしてきた「授業と生徒指導の一体化」を追求していきます。



Ⅱ 信頼関係の構築のために

～考えてみましょう～

- ・先生が児童生徒と信頼関係を築くために心がけていることは、どんなことですか？
- ・なぜ先生との信頼関係が大切だと考えますか？

Ⅱ－Ⅰ 児童生徒理解と信頼関係

学習や生活の指導・支援の基盤の一つが児童生徒理解です。児童生徒のよさ、困りごと、感じ方等を多面的に理解します。

児童生徒理解をもとにした適切な指導・支援が信頼関係の構築や、更なる児童生徒理解の深化を生み出します。

子どもと積極的にかかわり、一人一人の子どもや学級集団の実態・状況を多面的に把握し、とりわけよさを理解することが基本です。

(1) 多面的な理解

子どもたちは、それぞれ個性を持っています。子どもたち一人一人のよさや個性を理解することで、教師はその子に合った支援方法や指導内容を選択することができ、子どもたちは自分の可能性を最大限に発揮することができます。また、問題行動が起きた時、その背景を多面的に理解することで、その原因を特定し、適切な対応策を講じることができます。子どもたちは、教師の適切な支援によって成長することができます。

担任を中心とした教師の観察に加え、その子どもに係る情報(*)も考慮して、その子の背景を把握しましょう。また、学年部、教科担当、部活(クラブ)顧問、養護教諭、用務員、スクールカウンセラー等、子どもと多様な立場で関わる教職員からの情報も有益です。大切なのは、全ての教職員が、「子どもに関心をもって肯定的に関わる姿勢」、そして、「気になる様子が見られたら、日常的に情報を共有できる仕組み」です。学校全体でそのような風土や仕組みをつくっていきましょう。

この他に、いじめアンケートや生活実態調査等のデータに基づく客観的な理解も有効です。教育相談では、子どもの話を、受容・傾聴しながら共感的に寄り添う姿勢を大切にしましょう。

- *「家庭環境、成育歴、学力、得意・不得意なこと、興味をもっていること、学校内外の人間関係」等、その子ども自身のことやその子どもを取り巻く環境を指します。

(2) 子どもとの関わりの中での理解

授業の中でも次のことを大切にしましょう。児童生徒に寄り添いながら、教師が理解しようとする姿勢は信頼関係構築の基盤です。

- 子どもをよく見る
 - 子どもの話をよく聴く
 - 子どもに寄り添う
 - 子どもとかかわる
- } よさ、困りごと、感じ方を理解

コラム

【多様な児童生徒の理解① ～授業で‘ほんとは困っている’子どもの姿～】

例えば、こんな様子が見られる児童生徒はいませんか？

- ・集中できない
- ・落ち着きがない
- ・友達とトラブルばかり起こす
- ・課題に全く手がつかない
- ・いつもぼんやりしている

児童生徒によっては、困っていることをうまく伝えられないこともあります。

- ・周りの空気を読みすぎてしまうから
- ・恥ずかしがり屋で人に相談できないから
- ・自分の気持ちを言葉にできないから 等

一見、問題行動や怠学と思われる行動は、実は SOS のサインと考えられます。多面的な理解をもとに、子どもたちが安心して授業に参加できるよう支援していきましょう。必要に応じて、専門家に相談することも大切です。

【多様な児童生徒の理解② ～人一倍敏感な子ども(HSC)～】

HSC(Highly Sensitive Child)は「人一倍敏感な子ども」のことを言います。

約5人に1人がHSCと言われていることから、学校では、どの学級にもそのような児童生徒が存在すると考えられます。HSCの子どもは思慮深く、他人の気持ちに敏感で、些細な変化にも気がつき、慎重に行動したいと思う、という特徴があります。学校生活には、そのような児童生徒にとって刺激が強く、苦手とする場面が日常的に存在します。例えば、音楽の時間に出る音や給食の時間のご飯の匂いなどです。また、休み時間等のにぎやかな時間や、学校行事等で集団行動を行う場面では、とてもエネルギーを消耗するようです。子どもの行動の背景には、このような過敏な気質があるのかもしれない。

【多様な児童生徒の理解③ ～子どもの気になる行動の背景～】

ADHD や ASD 等と思われる行動と、愛着形成に課題がある場合の行動には、似ているものがあります。例えば、落ち着きがない、集中力がない、衝動的な行動が多い、対人関係が苦手、感情のコントロールが難しい、などです。多面的な理解をもとに、困った行動の原因を把握することが適切な支援につながります。必要に応じて専門家にも相談しながら、チームで進めていきましょう。

◆「多様な児童生徒の理解」については、次の資料も参考にしてください。

「新潟市特別支援教育サポートブック」(新潟市教育委員会特別支援教育課 令和6年度版)

第2章 学級づくり・授業づくり編 6 子ども困っていることへの対応(54ページ～)

➤ 振り返ってみましょう

- ・児童生徒の「多面的な理解」のために、今行っていることはどんなことですか？
- ・その手立ての中で、よりよく理解していくはどうしたらよいと思いますか？

Ⅱ－２ 子どもと関わる際に大切にしたいこと

身なりや服装、名前の呼び方に気を配ることは、子どもたちの安心感と信頼感の醸成に加え、教育者としての模範、保護者からの信頼という点でもとても大切です。

(1) 身なり

私たち教師は教育公務員として勤務しています。それゆえ、教師には高い倫理観が求められ、服装や身なりもその一部です。清潔感があり、TPOに応じた服装は、子どもたちに安心感を与えます。また、教師は子どもたちにとって、社会に出る上で模範となる存在です。きちんとした身なりで子どもと接することは、子どもたちが社会性を学ぶ上で重要な役割を果たします。

また、保護者の方々も、教師の身なりや服装を見ています。TPOに応じた服装は、一人の社会人として保護者から信頼を得る上でも重要です。

(2) 言葉遣い（話し方）

子どもたちは、周りの大人の言葉遣いを模倣しながら言葉を覚えるとともに、言語感覚も育ちます。特に、教師や保護者など、身近な大人の言葉遣いは、子どもたちの思考や価値観の形成にも影響を与えることは想像に難くありません。

教師から、温かみのある言葉遣いで労いや称賛をもらった子どもは、自尊心や自己肯定感が高まり、更によりよくなりたいと意欲が湧くでしょう。逆に、配慮のない否定的な言葉や侮辱的な言葉を耳にした子どもは、たとえそれが他の子どもに向けられたものであっても、心は傷つき、学校や教室は安全で安心な場ではなくなります。

子どもを一人の人間として尊重し、丁寧語で話すことを基本としましょう。乱暴な話し方や感情的な言葉遣いは、子どもを委縮させたり、時としていじめを助長することにつながったりすることがあります。どんな子ども、間違いや失敗、苦手なこと、分からないことが安心して言える雰囲気になるよう、言葉遣いにも意識を向けましょう。

(3) 呼び方

子どもたちのことをどう呼ぶかは、子どもたちとの距離感や関係性を築く上で重要な要素となります。適切な呼び方は、子どもたちの自尊心を尊重し、信頼関係を築く上で重要な要素です。

授業で子どもの名前を呼ぶときは「～さん」を付けて呼ぶようにしましよ

う。子どもに、「あなたのことを大切に思っている」ことが伝わります。個人を大切な一人として尊重する第一歩です。

コラム

子どもを呼ぶときに「お前」と呼んだり、呼び捨てやあだ名で呼んだりすることが、子どもとの親密さにつながると思うことや、そのように呼ぶことで、子どもとの上下関係をはっきりさせたいと思うことは、教師の一方的な思い込みです。呼ばれる子どもだけでなく、その様子を見ている他の子どもたちにも影響を与えます。子どもに対する、日々の教師の発言や呼び方が、子どもの人権感覚を育てていることを意識しましょう。

(4) 表情

「目は口ほどにものを言う」という言葉があるように、子どもは、教師の「表情」「アイコンタクト」「身振り手振り」等から教師の気持ちを読み取ります。非言語によるメッセージは、言語によるものより多くのメッセージを伝えるとされています。

子どもは先生方の立ち振舞いをよく見ています。笑顔でさわやか、そして温かく接する先生の姿がロールモデルとなり、子どもたち同士の良好なかかわり合いも増していきます。

(5) 時間を守る

時間を守ることは、子どもたちが時間管理の概念を身につける上で大切な要素です。また、時間を守ることは、社会生活においても信頼関係を築く上で基本となります。教師が時間割やスケジュールを守る姿を通して、子どもたちは時間を意識し、計画的に行動することを学びます。

また、授業の開始や終了時刻を守り、子どもが移動時間や休憩時間を確実に確保できる環境は、安心して安全な学校生活につながります。授業進度の関係で、授業を延長しても、肝心の子どもたちの集中力は続かないものです。中には、時間通りに進まないと不安になったり不安定になったりする子どももいます。

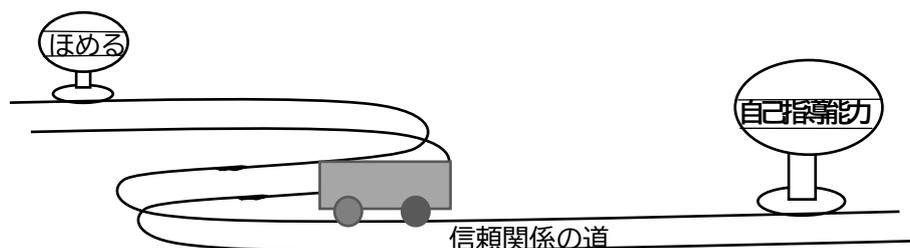
➤ 振り返ってみましょう

	【服装・立ち振舞いをチェックしてみましょう！】	チェック
1	誰に対しても、自ら進んであいさつをしています	
2	社会人としてふさわしい格好で出勤・退勤しています	
3	授業にも、場面に応じた節度ある服装で臨んでいます	
4	迅速な行動がとれる靴を着用しています	
	【話し方についてチェックしてみましょう】	チェック
1	できるだけ、明るい表情で子どもに話しかけています	
2	説明が長くならないよう、端的に要点を絞って話しています	
3	子どもの名前を呼び捨てにしないようにしています	
4	相手が傷付くような言葉、差別的な言葉は使いません	

Ⅱ－３ 信頼関係を築く「ほめる・認める・(叱る)」

(1) ほめ・認める → 信頼関係 → 自己指導能力

子どもへの指導・支援や信頼関係構築に向け、ほめる・認める（感謝するも含む）という姿勢を基本とします。子どもは自分が頑張ったことや望ましい行為を認められると、自分を高めたり、社会で適切に行動したりすることを学習することに繋がります。また、期待をかけ自信を与え、自己肯定感を育むことは、信頼関係の構築に作用します。



(2) 先生がほめる・認めることで**教師と子どもの信頼関係**を築く

① 何をほめ・認めるか

○子どもが自分を伸ばすことに繋がる行為

○周りのためになる行為

※教師の「良し悪しの基準」ではなく、子どもの「行為の基になっている思い」を汲み取る

※結果だけでなく、過程や行動を見取る



〇〇さんは、縄跳び100回に向けて毎日練習を続けているね。目標達成に向けて努力しているんだね。



〇〇さんは、図工（美術）の授業の後、水飲み場が絵の具で汚れていたのを拭いてくれていたね。ありがとう。

② 誰に、どこで伝えるか

○直接そっと本人に、みんなの前で堂々と

注：発達段階や事案により、人前でほめられるのを嫌う子どもや、ほめられる子どもを認めない子どももいることに配慮

○第三者（保護者、担任外の先生、友達、関係者）を介して

③ どんな方法で伝えるか

○対面の言葉（すごいね、頑張ったね、うれしいよ、ありがとう・・・）

○サイン・表情（アイコンタクト・ジェスチャー・笑顔・声色・・・）

○可視化（賞状・花丸・スタンプ・ご褒美シール・・・）

コラム

「ほめるところがないんです。」と嘆く先生もいらっしゃいます。そんなときは、ほめる必然性をつくるのも手です。

たとえば、「先生と一緒に水飲み場の汚れを落としてくれる？」と用事を頼みます。子どもが頼まれたことをしたら、その子をしっかり見て「ありがとう」と言います。

このことで、行動と「ありがとう」が必然性をもち、先生と子どもとのコミュニケーションづくりにもなり、お互いの信頼関係をつくるきっかけになります。

このような小さな成長でも（成功・失敗に関係なく）望ましい行動、挑戦している姿、頑張っている姿をほめ・認めましょう。

特に、叱られたり、うまくできないことが多い子どもがいたら、「あなたもきっとできるようになるよ」「今のあなたも十分頑張っているじゃない」などと優しく励ましたり、他の子には当たり前なことでも「よくできたね」と些細な成長もほめたりすることで、「先生は、私のことをいつも見守ってくれている」という安心感をもたせることが大切です。「できる」と判断することが教師の尺度になっていないか留意し、その子にとっての「できる」を見届ける眼を持ちましょう。

(3) 保護者がほめる・認めることで**教師と子どもの信頼関係**を築く

学校からの連絡帳や通信、電話などでよい知らせを伝えることで、保護者が子どもをほめたり認めたりする機会が増えます。間接的に教師と子どもとの信頼関係を築くことになります。



(4) 子どもが互いにほめる・認め合うことで

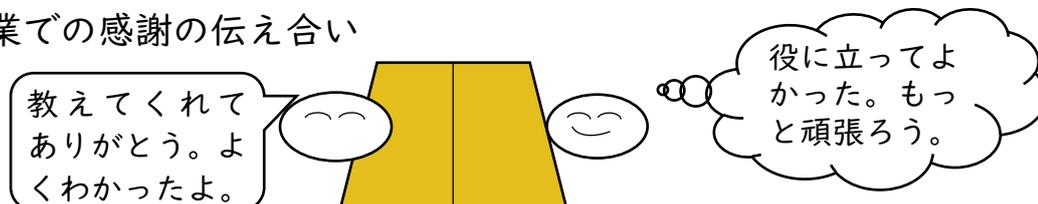
子ども同士の信頼関係を築く

学級活動や授業中に、子どもが互いにほめたり認めたりする活動を仕組みます。

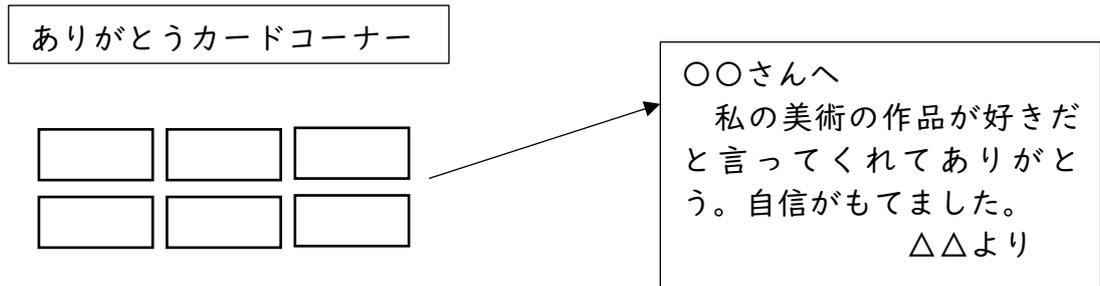
①学級、ホームルームでの紹介タイム



②授業での感謝の伝え合い



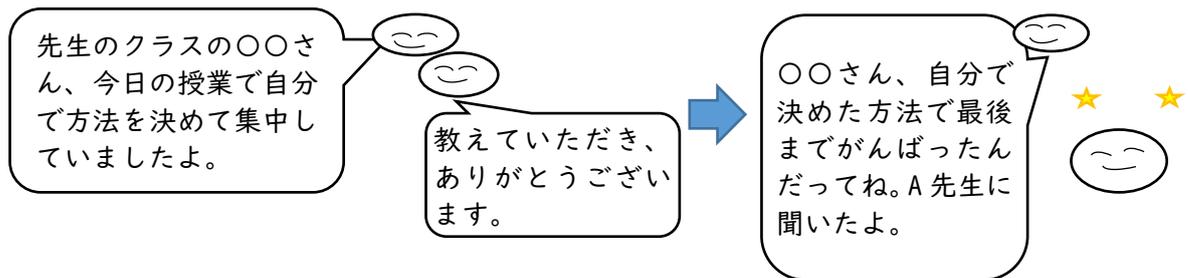
③掲示物での紹介（ありがとうカード・いいねカード）



(5) 全職員でほめる・認めることで

教師同士、教師と子どもとの信頼関係を築く

学年会や職員会議、休み時間などで情報の共有を行い、担任以外の様々な先生が子どもをほめたり認めたりできる環境を整えます。教科担任制等により様々な教師が違う見方で子どもを捉えていることを知り、多面的に見る機会になります。子どもにとっては担任以外にも話しやすい先生が増えることにもつながります。



(6) よくない行動は、合意形成を図りきちんと叱り、一緒に考える

子どもは発達途上の成長段階にいますので、不十分、不適切な行動をすることがあるのは当然です。教師の役目は、子どもに不適切であることに気付かせ、次からはどうするのかを自己決定させること、そして望ましい行動が取れたら、必ず認めてほめることです。これらのことが子どもの自己指導能力の育成に大きく影響するのです。

①子どもの話に耳を傾ける

子どもが不十分、不適切な行動をした時、教師のフィルターのみで決めつけ、注意したり叱ったりすることはできるだけ避けます。

まず教師は「そのとき、その子どもに何があったのだろう」と冷静に捉え、話を聞きます。子どもに話を聞くときには、「起きた事実」と「その時の感情」を区別しながら聞き取ると、振り返りにつながりやすくなります。また状況によっては、紙やホワイトボードなどに書いて子どもと一緒に見て確認しながら聞き取ると効果的です。

ただし、命や人権にかかわる重大な状況の時や緊急性が高いときは、毅然とした態度で確実にその行動を止めさせてから、子どもの気持ち収まるのを待って聞き始めることが必要です。

②内省を促す

子どもの思いを受け止めながらも、行動修正を促すには、なぜその行動が不適切なのか、その行動をどう思うのか考えさせたり引き出したりして内省を促します。「信頼しているあなたがそんなことをするのはとても残念です。」と行動だけを叱り、子どもへの肯定を含んだメッセージで伝えることが有効です。

③これからを一緒に考える

不適切な行動をした時、「代わりにどうしたらよかったのか」「次に同じことをしないためにはどうしたらよいか」を一緒に考えます。その子どもにとっては成長のチャンスでもあります。子ども自身がどうしたいかを丁寧に聞き、そのためにはどうすればよいか、必要に応じて助言・提案しながら、子ども自身の選択・決定を促します。子どもの合意なしに「〇〇しなさい。」と強制したり、安易に謝らせて解決を急ぐのは避け
ます。

大切なのは、その後、子ども自身が自己指導能力を高め、望ましい行動を取れるようになることなのです。

コラム

【ピグマリオン効果】

アメリカの教育心理学者ローゼンタールによって提唱された教育心理学における心理的行動の一つです。

人は、他者から期待されると、期待に沿った成果を出す傾向にあるという現象のことを言います。「教師期待効果」とも呼ばれます。

【PBIS (Positive Behavioral Interventions and Supports)】

学校環境におけるポジティブな行動介入と行動支援と訳されます。この考えの中には、望ましい行動を具体的に確認し、行動をできたら価値付けたりほめたりして行動を強化することが含まれています。新潟市の学校でも、理論を具体化して実践し、効果を上げているとの報告があります。

Ⅲ 全ての子どもたちの成長を促すために

～考えてみましょう～

- ・「授業における生徒指導」と聞いて、どのような指導・支援が思い浮かびますか？
- ・なぜ授業づくりと生徒指導の一体化が大切だと考えますか？

授業に内在化した生徒指導が重要です。授業は、児童生徒が自ら発達することを支える生徒指導の実践の場です。児童生徒自身が、自分のよさや個性を伸ばし、社会性を身に付けるように、教師は授業のなかに生徒指導の視点を意識して組み込んでいきます。

Ⅲ - 1 生徒指導の目的

生徒指導とは、児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができ存在へと、自発的・主体的に成長や発達できるように、その過程を支える教育活動です。

【生徒指導の目的】

生徒指導は、児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的とする。

生徒指導において「発達を支える」とは、以下の5つの発達を含む包括的なものを意味します。

- ① 児童生徒の自信・自己肯定感（心理面）
- ② 興味・関心・学習意欲（学習面）
- ③ 人間関係・集団適応（社会面）
- ④ 進路意識・将来展望（進路面）
- ⑤ 生活習慣（健康面）

そのため、生徒指導は、単に規律を守らせるだけではなく、児童生徒自らが、行動を内省し、改善できるように、自己指導能力^{※1}の獲得を目指していくことが重要です。

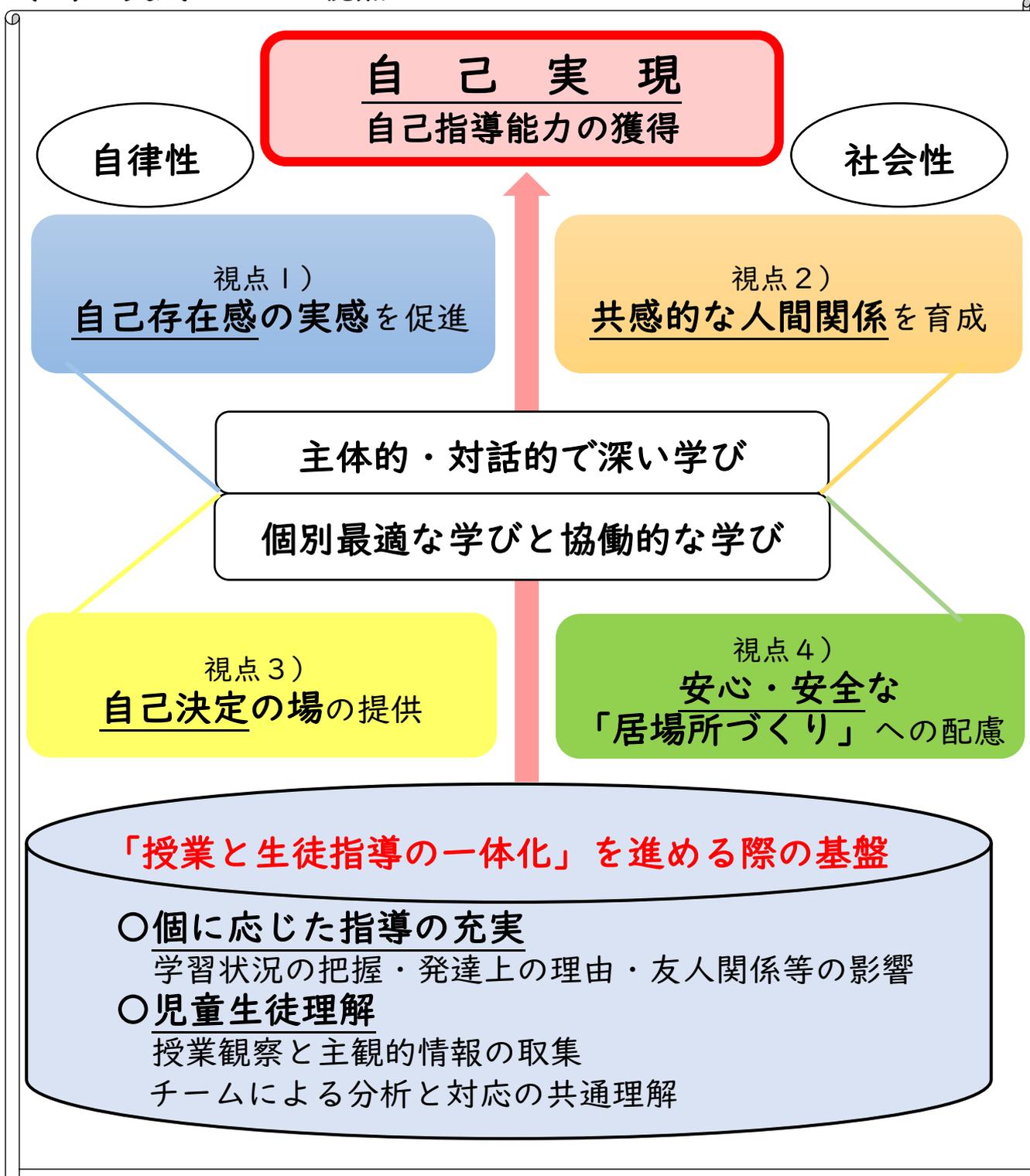
※1 自己指導能力

児童生徒が、深い自己理解に基づき、「何をしたいのか」「何をすべきか」、主体的に問題や課題を発見し、自己の目標を選択・設定して、この目標の達成のため、自発的、自律的、かつ、他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する力のことです。

Ⅲ - 2 授業づくりと生徒指導の一体化

授業場面では、学習指導と生徒指導を分けて考えるのではなく、相互に関連付けながら、両者の充実を図ります。「個別最適な学び」で重視する「自己決定の場」は、生徒指導の大切な要素です。また、「協働的な学び」に不可欠な「共感的な人間関係」も生徒指導の根幹となります。主体的・対話的で深い学びの充実は、自発的・主体的な成長を促す生徒指導につながります。

(1) 実践の4つの視点



視点1) 自己存在感の充実を促進

※p12とp13の視点は、p11の図と対応させた順番で記載しています。

○「どの子どもにもわかる授業」

「どの子どもにとっても面白い授業」の実践

自分も一人の人間として大切にされている実感をもたせる

1 存在感を育む環境づくり

・承認や称賛、励ましを積極的に行う。

2 個別に存在感を育む場面作り

・計画的な机間指導・支援を行い、一人一人の良いところを具体的に評価する。

3 仲間と存在感を感じ合うことができる場づくり

・協力して活動できるように、ペアやグループ活動等を取り入れる。

個別最適な学びの実践

Aプラン

単元前半…一斉授業で基礎を押さえる。

単元後半…前半での学びを生かして自由に進める。

★自分のペースで取り組む個別化は、他者との比較による焦りや不安感を軽減→教室にいる安心感と課題に対する達成感へつながる。

Bプラン

単元前半…自分が取り組みたい課題を見つける。

単元後半…自分の課題を追求する。

★自分の強みを生かしながら学習することを通して、自分の得意なことを生かしたという自己有用感につながる。

視点3) 自己決定の場の提供

○子どもの学びを促進する授業の実践

自分の力で考えて、決めて、頑張ることができたという実感をもたせる

1 自己決定のための情報提供・環境整備

・考える視点や方法、調べ方などについて情報を与える。

2 自己決定に向けた活動場面づくり

・気づいたことや考えたことを書かせるなど、発言前に調べたり考えたりする時間を確保する。

・友達と自由に考えをやりとりする時間、活動を設定する。

・ペアやグループ、学級の中で、自分の考えを発表する場を設定する。

視点2) 共感的な人間関係の育成

○子ども同士が互いに関心を抱き合う授業の実践

互いに認め合い・励まし合い・支え合える学習集団づくりを行う

1 教師の共感する姿勢づくり

- ・子どもの発言・発表に、うなずきや相槌で反応する。
- ・発言を板書する。

2 仲間との共感関係を育む場づくり

- ・相互評価など、互いのよさを認め合う活動を取り入れる。

3 共感的関係を確認し安心できる雰囲気づくり

- ・友達の発表に対して、発表者の方を向いて聴かせる、反応しながら聴くようにするな

協働的な学びの実践

「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、子ども同士、あるいは他者との協働を通して、互いを尊重しながら、必要な資質・能力を育成する。

また、集団の中で個が埋没することのないよう、一人一人のよい点や可能性を生かし、異なる考えであっても組み合わせるとよりよい考えが生み出されることを実感できる場面を設定する。

- ・AさんとBさんの意見は似ているね。
- ・Cさんの意見に付け足すと……
- ・考えをつなげるとこんなことができそうだ。

視点4) 安心・安全な「居場所づくり」

○個性が尊重され、安全・安心して学習できる授業の実践

全ての子どもが安心して過ごせる、心の安定を支える学級づくりを行う

1 ルールづくり

- ・間違ったり失敗したりしても笑わない
- ・冷やかさないことを事前に約束しておく。

2 人・学級への貢献を認める

- ・課題を抱える子どもに寄り添ったり、相談に乗ったりした姿を称賛する。
- ・学級（みんな）のために行う行為を、称賛する。

3 集団の合意形成練習

- ・合意形成を図る話し合い活動（短時間の話し合いもあり）を続ける。

4 場づくり

- ・友達と仲良くなるための活動を準備する。
- ・行事で、子どもに任せる部分を設ける。
- ・人間関係を構築する仕組みを作る。例) 係活動、学級イベント
- ・学校行事で子どもに任せる部分を設ける。

～生徒指導は教育活動全体を通して行われます～

■特別活動と生徒指導

- 特別活動は、集団活動を通して、「児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支える」という生徒指導の目的に直接迫る学習活動と言える。
- 「いじめ」や「不登校」等の未然防止も視野に入れ、児童生徒が互いに尊重し、可能性やよさを発揮する等、よりよく成長し合えるような集団活動を展開するよう努める。

■道徳教育と生徒指導

- 道徳教育は生徒指導と「相互補完関係」にある。道徳教育で培われた道徳性を「生きる力」として日常の生活場面で具現化できるように支援することが生徒指導の働きである。また、生徒指導上の課題に児童生徒が主体的に対処できる力を育む基盤となるのが道徳教育で育まれた道徳性である。

■総合的な学習と生徒指導

- 探究のプロセス（①課題設定→②情報収集→③整理・分析→④まとめ・表現）に沿った学習活動が、児童・生徒の主体的な選択・決定を促す「自己指導能力」の育成につながる。
- 他者との交流や協働を通して、学習活動が発展していく中で、自分とは異なる見方・考え方があることに気付いていく。また、地域等の大人との交流を通して、社会参画意識の醸成にもつながる。

参照：「生徒指導提要」文部科学省 2022

「令和の日本型学校教育の構築を目指して（答申）」文部科学省 2021

「これからの児童生徒の発達支持」 八並光俊・石隈利紀 ぎょうせい 2023

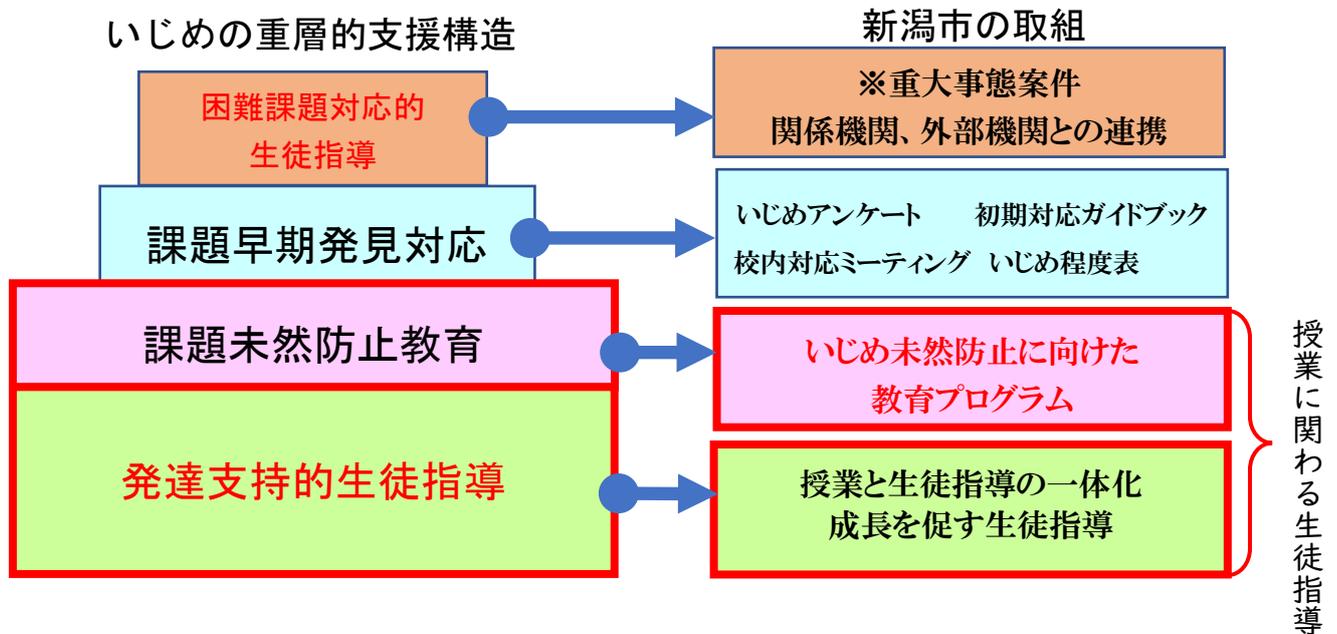
「NITS 校内研修シリーズ 生徒指導Ⅰ・Ⅱ」独立行政法人教職員支援機構 2023

「生徒指導リーフ2 絆づくりと居場所づくり」国立教育政策研究所 H24

「これからの学習指導—個別最適化・協同・動機づけ—」公益社団法人学校教育開発研究所 2023

「生徒指導提要を現場の目線で読む 第2章」東洋館出版社 2023 <https://www.toyokan.co.jp/blogs/student-guide>

生徒指導は、児童生徒の課題への対応を対象や課題性の高低という観点から、構造化することができます。授業に関わる生徒指導は、「課題未然防止教育」と「発達支持的生徒指導」に当たります。先述した、自己指導能力※1が獲得できるように授業づくりや環境づくりを進めていくことが大切です。



➤ 振り返ってみましょう

- ・授業の中で行う生徒指導として、今どんなこと行っていますか？
- ・「授業づくりと生徒指導の一体化」について新たに気付いたことはどんなことですか？
- ・視点1～4で、これから取り入れていきたいと思ったことはどんなことですか？

Ⅲ - 3 集団づくりの視点～支持的風土の醸成～

学校生活において多くの時間を過ごす学級は、学校生活における学習環境そのものであり、生活環境そのものでもあります。全ての児童生徒が安心して自分らしさを発揮し、自分の可能性を追求できる集団づくりを目指しましょう。



「支持的風土」づくりで大切なことは何ですか？



支持的風土とは

**「認め合い、助け合い、期待をかけ合い、高め合う
温かい学級の風土」
のことを言います。**

「傾聴・受容」「支援」「自律」は支持的風土に向かうための筋道でもあります。

自立に向けて、状況を見極めて適切に判断し、行動するなどの「自律」を体現していくには、仲間の「支援」が必要です。仲間を「支援」していくには、相手の考えや思いを「受容」していく必要があります。「受容」するためには、「傾聴」し、相手の考えや思いに共感することが欠かせません。

(支持的風土だより「テロワール」(学校支援課 2019)より)

傾聴・受容

- ◆相手を理解するために、積極的に関心をもって注意深く聴くこと。
- ◆言語メッセージだけでなく、非言語メッセージ（表情・しぐさ・声の調子等）から、言葉の背後にある感情を受け止めて共感することが大切。
- ◆傾聴を行うことで、引き出された相手の気持ちや考えを尊重し、相手が安心感を得ること。
- ◆聞き手がそのまま受け止める態度や姿勢を示すことが大切。

支援

- ◆相手の立場や状況、気持ちに応じた援助をし、相手に自信をもたせること（手を差し伸べる、時には見守る等、相手の身になって援助することに心掛けることが大切）。
- ◆相手が困っている時には、誰かれなく進んで手を差し伸べること。

自律

- ◆事実を基に的確に状況を捉え、自分の目標、集団に共有されている価値に照らして適切に判断し、行動できること。また、自分の行動に責任をもつこと。
- ◆自分の行動を振り返り、今後どうすべきか考えること。

～ 支持的風土の理念 をもう少し詳しく～



傾聴・受容

～ 「聴くことに始まり聴くことに終わる」 ～

話を聴くことは人間関係づくりにおいても重要です。

「良い悪い」は一旦横に置いて、**まず相手（子ども）の話に耳を傾け**ましょう。自分の話をしっかり聴いてもらったり、聴いてくれたりする教師の姿を見た子どもは、徐々に聴き手として育っていきます。

「どの子どもも温かく丸ごと受入れ、平等に機会を与え、言動に寄り添い、支援し期待をかけ、達成感をもたせる」ことを大切にしましょう。

また、協働の場面など、相互に関わり合うことを大切にした学習を進めるには、子どもたちの聴き手としての傾聴態度がその学習の成功要因の一つとなります。

言語で伝わるメッセージは約7%、
非言語で伝わるメッセージが約93%と言われます。
両方のメッセージを聴きましょう。

「言語から伝わるメッセージを聴く」

「非言語を観察して聴く」

支援

「支持的風土づくり」のためには、教師が子どもを支援することは当然ですが、それだけでは十分ではありません。大切なのは、子ども同士が支援的な関係を結べるかどうかにあります。子ども同士が支援的な関係にある学級とは、次のような学級です。

子ども同士が支援的な関係にある学級の姿とは

- “一人残らず学級の全員がゴールする”ことを学級の全員が目標にしている学級

“一人残らず学級の全員がゴールする”とは、同時に全員がゴールすることではありません。自分さえできればよい、分かればよいというのではなく、学級の仲間全員がゴールを目指すのだという心構えを大切にすることです。このことを全員が共通理解している学級は、どんな場合でも、その時々で困っている仲間のことを考え、行動することを大切にしている学級です。

- 自分は誰からもいつでも助けてもらえる、自分から遠慮なく誰に対しても常に助けを求められるという安心感がある学級

助けを求める側には、常に断られたらどうしようという不安があります。そんな心配のいらぬ「相手は決して断らない、必ず教えてくれる」という信頼関係で結ばれている学級です。

- どの子どもにも必ず出番がある学級

出番の少ない仲間にはみんなで出番を譲ったり、作ったりし合える学級です。失敗しても恥ずかしくない、むしろ、みんなが応援してくれるという確信があれば、どの子どもも安心して挑戦できます。

「支援」は、基本的には、相手が困ったり、分からなかった時に助けたり、教えたりすることですが、そこで大事なことは、あくまでも“一緒に学ぶ”という姿勢で「支援」すること、相手の“一人立ち”を目指した「支援」であることが重要です。

自律

「自律」は、社会人として大事な“状況を見極めて適切に判断し、自ら実践する”ことを目指しています。状況を見極めて適切に判断し、自ら実践する力の育成を見据えて、学級としての「自律」、個人としての「自律」を目指した支持的風土を醸成していくことが重要で

【自治的な学級集団とは】

集団生活に必要な規律やルールを自分たちで決め、それを進んで守り、自分たちの問題や課題は、自分たちの力で知恵を出し合いながら仲間と共に解決しようとしていく集団。

自律した学級集団の姿

規律やルールを他律的なペナルティを伴って守らせるのではなく、時間がかかってもその規律やルールの意味を理解し、自分たちで働き掛けながら進んで守っていこうとする学級。

指導の方向性

自分たちの活動目標を決め、その成果を自分たちで評価しながら前へ進んでいくPDCAサイクルを学級として機能させている学級。

教師の構え

- 規則やルールは、罰則を伴って守らせるものではなく、「互いに気持ちよく学習や活動をするためにみんなで守ろう」という姿勢を育てる。
- 不正には厳しい態度で臨み、学級では「正しいことを正しいこととして、遠慮なく言って実践しよう」という気持ちを育てる。
- 「自分の学級が大好きだ」「自分の学級が誇らしい」という思いを、誰もがもてることを目指す。

個人としての「自律」に必要なこと

自分の状況を正確に自己観察し、修正する力を付けること

この力を付けるには、①～⑥の過程を、子どもに意図的に経験させることがポイントです。授業や学級活動、学校行事等での振り返りや、キャリア・パスポートを有効に活用しましょう。

そして、子どもが自分で意識して行うことができるようにしていきましょう。

- ① 集団の目標を踏まえたうえで、自分の目標を立てる。
同時に評価項目も一緒に設定する。
- ② 目標を達成するための有効な手立てを考え、決める。
- ③ 達成のための実践、努力を主体的に行う。
他との連携が必要な時には自分から求める。
- ④ 活動の終了時（長いスパンの時には中間）や一定の期間が過ぎたら自己評価を行う。
- ⑤ 評価結果に基づき、振り返りを行う。
- ⑥ 振り返りを次の活動に生かし、振り返りを基に新たな活動目標を立てていく。

<振り返りの観点の例>

- 何が効果的だったか。それはなぜか。
- 何がうまくいかなかったか。それはなぜか。
- もし、また同じことをやるとしたら何を変えるか。
- この考え方は、どんな時に使えるか。

「自律」の心を育てるためには、「自己を見つめ、振り返る」時間や機会が必要です。そのためには“書く”という行為がとても重要です。なぜなら、“書く”ということは“考える”ということであり、“書く”という行為を通して、自己との対話を深め、より深く自己を見つめることができるからです。“書く”ことは、「自律」の心を育てるために欠かせないものです。

子どもが書いたものに対し、教師が感想やアドバイスを送ることも、子どもの「自律」の心を磨いていくために極めて有効です。

IV 全ての子どもたちの学びの保障に向けて

～考えてみましょう～

- ・先生が学習面または行動面で著しく困難を示す児童生徒のニーズに応じるために心がけていることは、どんなことですか？
- ・なぜ特別支援教育の視点が必要だと思えますか？

IV-1 UD（ユニバーサルデザイン）の視点

(1) 全ての教師に求められる特別支援教育の専門性

文部科学省の調査では、通常の学級に在籍し、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒は8.8%存在します。そのニーズに応じるためには、特別支援教育の視点をもった授業づくり、学級経営が必要です。

平成24年7月に中央教育審議会より「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」の中で、通常の学級担任に求められる専門性として「すべての教員は、特別支援教育に関する一定の知識・技能を有していることが求められる。特に発達障がいに関する一定の知識・技能は、発達障がいの可能性のある児童生徒の多くが通常の学級に在籍していることから必須である。」とあります。

(2) UDの視点を取り入れた授業

全ての子どもが、授業に参加して、充実した時間を過ごすために、UDの考え方を取り入れて、工夫改善を進めていくことが重要です。ロナルド・メイス教授が提唱した「ユニバーサルデザインの7原則」により、支援や工夫、配慮した授業を目指しましょう。

7つの原則

①公平性

全ての子どもが学習に参加しやすい環境を整えることを目指します。

例：黒板周辺の掲示物を少なくする レベル別（進度別）の課題



②柔軟性

学習活動の内容や方法を柔軟に調整し、児童生徒の多様なニーズに応じることを目指します。

例：「ここだけ書いてね」あとは選択できる
タブレット活用

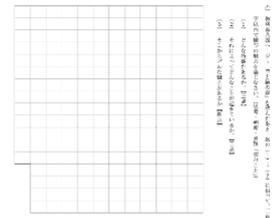


板書を全てノートに書かなければならないのは、柔軟性がない。

③機能性：シンプルで直感的

学習をサポートするための便利なツールやアプローチの使用です。

例：大きなデジタルタイマー
資料にマスキングし焦点化

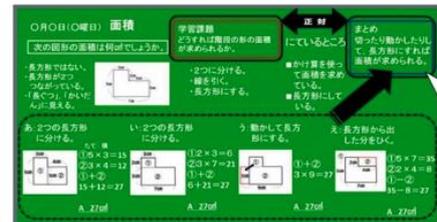


マス目があることで、どのくらい書けばいいのかがパッと見て分かる→ユニバーサルデザインの

④わかりやすさ

子どもが学習内容を理解しやすいよう、視覚的、音声的な支援を行います。

例：学習計画や手順・流れを視覚化



- ・枠で囲う
- ・アンダーライン
- ・色分け
- ・端的な言葉
- ・カード
- ・写真
- ・イラスト

⑤安心感：誤りに対する寛容性

子どもがリラックスして学習に取り組めるような環境づくりを促進します。

例：座席の配置の工夫

事前に教師と練習できる時間を設ける

一人でなくペアやグループでの活動や発表

安心感に基づいた学級経営

- ・間違ってもいい「安心感」
- ・困ったときに助けてもらえる「安心感」
- ・自分だけ違ってもいい「安心感」
- ・「いじめ」のような身の危険を感じることがない「安心感」
- ・「不登校」になっても、いつでも復帰できる「安心感」
- ・「日本語」がわからなくても大丈夫な「安心感」

⑥楽に使える

学習資源や教材が簡単に利用できるような工夫です。

例：文章や図形の拡大表示、タブレットでの音声入力、ヒントカードの使用



- ・板書をタブレットで記録
- ・フリック入力やキーボード入力の活用

⑦十分な広さ

教室全体での学習資源や情報を確認しやすい様に、スペースや配置を意識します。

例：教室前面をすっきりさせる、教室のどこからでも板書が見えるように座席を配置する



- ・教室前面、黒板周辺の掲示物を少なくする（スッキリさせる）

(3) 学び方のオプション

学習に関する具体的なプロセス（学習方法、内容、ツール等）にオプション（選択肢）を組み込んで、子どもが自らの学びに適した方法を選択することで、主体的な学習を目指すことです。子ども一人一人が自分の得意な学び方を理解して、学びを進めていくことは、個別最適な学びと一致します。

苦戦している子どもだけでなく、「全員」を対象にして自分が得意な学び方を認めていく方法です。3つの方法があります。

- 1 取り組むための多様な方法
- 2 考えるための多様な方法
- 3 伝えるための多様な方法

① 全員へのオプション

子どもが自分に合った学習方法、内容、ツールを選べるようにすることで、多様な学び方を保障します。

「方法Aと方法Bのどちらかを選んでください」

例：ワークシートを紙とデジタルの両方で配付し「手書き、キーボード入力のどちらかを選んでください」

- ・調べ方や発表の方法「一人で、ペアで、グループ、どれで行うか選んでください」

- ・解決方法「自分で解く、友達と相談する、先生と一緒に解く、どれにするか選んでください」
- ・発表方法「全体の前で話す、録画・録音したものを使う、どちらにするか選んでください」など

② 困難を感じている子どもへのオプション

学習に困難を抱えている子どものために別の方法を提供して、サポートします。

「方法Aでやりましょう。BでやるのもOKです。」

例：暗唱が苦手な子どもに朗読のオプション

- ・話すことが苦手な子どもにタブレットの読み上げ機能を提供
- ・例文や型を提供し、それに基づいて書く選択肢
- ・先生の模範シートを参考にすることや、虫食い式シートを活用

全員がゴールを目指しますが、同じゴールや一律の「繰り返しと努力」で乗り越えさせることは、多様性を大切にする教育の方向とは異なります。一つの方法だけでなく、代替手段や誤りに対する寛容性を教師がもち、意識を変えていくことが大切です。

- ・間違ってもいい安心感
- ・困ったときに助けてもらえる安心感
- ・自分だけ違ってもいい安心感
- ・日本語が分からなくても大丈夫な安心感

解く問題数を同じにしたり、板書を全てノートに書かなければならないとしたりするのではなく「ここだけ書いてね、あとは一人一台端末のカメラ機能を活用してもいいよ」など、取り組む量や方法を選んだりすることができるようオプションを提示します。子どもが自分に合った方法で無理なく学びを進めることができます。

UDの視点による支援や工夫、配慮は、学びに困難を感じている子どもには「ないと困る支援」、他の子どもにとっては「あると便利な支援」です。

➤ 振り返ってみましょう

- ・どの児童生徒も学びやすいように、今行っているUDはどんなことですか？
- ・今行っている手立てをよりよくするにはどうしたらいいと思いますか？

コラム 【体育におけるUD ルールや用具の工夫】

～ みんなとできないバスケットボールから、みんなのできるバスケットボールへ ～

Aさんは、小学校6年生、通常の学級に在籍しています。下肢にまひがあり、車いすで移動をしますが、上肢は自由に使えます。知的な遅れもありません。

ある日の体育の授業は、バスケットです。TVで見るバスケットが大好きなAさん。

「ようし、やるぞ!」とやる気満々。

「でもなあ、車いすを操作していると、両手が使えないし、ボールは重いし・・・」

「スピードについていけるかな、ボール怖いし・・・」「チームに迷惑かけるかな・・・」

Aさんの思いを知った先生は、Aさんとみんなが楽しく取り組むために、バスケットボールの運動特性を生かした、こんな新しいバスケットボールをみんなに提案しました。

「床にフラフープを置き、その中に一人ずつ入ります。そこから出ません。ボールはバスケットボールと同じ大きさの軽いスポンジボールです。当たっても痛くありません。

ボールは転がしてもパスしても、カットしてもOKです。

床の真ん中に置いたゴールにシュートします。ルフル小学校バスケットボールです。

さあ、みんなで作ってみよう! 楽しいぞ!」

評価の視点は、次のようにしました。

「知識及び技能」

- ・ゴール型ゲームのルールが分かり、ゲームを行うことで、運動の楽しさを味わう。

「思考力、判断力、表現力等」

- ・友達とルールや環境を工夫したり、作戦を考えたりする。

「学びに向かう力、人間性等」

- ・ルールを守り、友達と仲良く運動する。
- ・運動に進んで取り組み、用具やルールを工夫している。

このように、ルールや用具を工夫することですべての子どもが、楽しく参加できます。また、正規のルールや用具で運動に取り組みたい子どもには、選択できる場や機会を用意し、その思いを大切にします。その際、評価の視点や規準・基準を教師が明確にすることで、子どもの取組が適切に評価されます。

コラム 【授業や学級経営におけるUDの視点】

～ みんなが分かる、みんなができる、みんなが楽しい ～

1 授業のUD

(1) 焦点化：1時間の授業で何を教えるか、その焦点を絞ること。

(2) 視覚化：説明や指示などを板書や絵や写真、映像などによって視覚的に示すこと。

(3) 共有化：子どもがペアやグループで考えを伝え合ったり、教えあったりすること。

2 教室環境のUD 提示物の工夫、「暗黙のルールやマナー」の視覚化 など

IV-2 日々の授業での教授行動・授業技術

～考えてみましょう～

・先生が日々の授業での教授行動・授業技術で、今、力を入れて行っているのはどんなことですか？

構想した授業を実現するためには、教授行動や授業技術が不可欠です。他の先生の授業も参考にしながら、全ての子どもが「参加できる」「わかる」授業を目指し、ブラッシュアップしていきます。前述のUDの視点に直結する教師のふるまいです。

(1) 視線

基本：全員へ視線を向ける

全体指導の際には特に、子どもたち全員が視野に入る位置に立ちます。聞いているかどうか全員へ視線を向け、表情等を確認しながら話します。

子どもに発言を求める際も、発言者だけでなく、聞き手にも視線を向けます。発言に対し、聞き手がどのような反応をしているかを確認します。

何かを提示しながら子どもたちに向けて話をする際も、対象物を指さしながらも、できる限り子どもに視線を向けながら話します。

(2) 指示・説明

子どもたちに活動を促したり、様々な内容を理解させたりするための重要な教授行動です。UDの「わかりやすさ」を大切にします。

【指示】は、どう動いたらよいのかという具体的な行動を子どもに促すものです。

【説明】は子どもたちにとって、未知の内容について、すでに知っていることを手掛かりにしながら分かりやすく述べる教師の発言です。

指示や説明には次のようなことに留意しましょう。

- ① 対象の子どもたち全員を、注目させ、聞く状態にあるか確認する。
- ② 何についての指示・説明かを伝える。
- ③ 5W1Hで内容を整理して伝える。繰り返しや付け加えは最小限に。話すスピードや声のトーンに変化をつけることも効果的です。
- ④ 内容や子どもたちの状況に応じ、音声言語だけでなく、板書等を活用し、視覚的に支援する。
- ⑤ 伝わったかどうか確認する。

コラム

子どもがノート書いているときや、グループ活動のときなど、聴く姿勢がないときに、発問・指示・説明をしても子どもは理解できません。「いったん書くのをやめましょう。(しばらく待つ) 黒板に注目してください」と指示した後に(全員が注目していることを確認して)「それでは、これからの活動について説明をします。黒板(モニター)を見てください」など、まずは子どもの聴く姿勢を作ることが大切です。

コラム

「1回に1文」の指示になるようにしましょう。促す行動が複数ある時は、「～して、～して、～しなさい」というようにまとめて言いがちになりますが、一つの指示で行動できたか、伝わったか確認してから、次の指示をします。また、言語指示だけでは理解することが難しい子どももいます。多様な子どもたちに対応するためには、聴覚だけでなく視覚からも理解できるように工夫します。例えば、

- ・ 発問内容を書いた紙を黒板に提示する
- ・ 作業の工程を図やイラストで提示する
- ・ 教科書のページを板書する

このように示すことも言葉の指示の理解を助けてくれます。

(3) 質問・発問

【質問】は、既に持っている情報や知識を確認したり、不明な点を解消したりすることが目的です。

【発問】は、子どもたちの思考を促したり、理解を深めたりすることが目的です。

質問だけでは、思考は深まりません。発問は、教材の内容にかかわって、思考を子どもに促すためのトリガーです。次のことを留意し、発問することが大切です。

- ① 何を考えていくのかが簡潔に分かる
- ② 複数の異なる考えが表出される
- ③ 文章や資料、既習事項、経験などにある事実や既有的知識や技能が関連付けられて表出される

コラムⅠ【発問と質問の違い(例)】

【質問】：調べれば分かる。

(質問例) Q 江戸時代の参勤交代は、大名たちにどのようなことを要求しましたか？

A (歴史的事実 ※子どもの考える余地がない)

【発問】：子どもの思考・認識過程を経るもの

(発問例) Q 江戸時代の参勤交代は、庶民の暮らしにとってよい政策だったと言

えますか？

A (様々な立場に立ったメリット・デメリットを洗い出し、整理・分析したうえで、自分の考えをまとめる。)

コラム2 【「バスの運転手さんは、どこを見て運転しているのでしょうか。」という発問がよいわけはなんですか？】

「バスの運転手さんは、どんな仕事をしていますか？」と聞かれたら、運転すること以外のことを考えるのは難しいのではないのでしょうか。子どもも同じです。しかし、「どこを見て運転していますか？」と聞かれると、バスの前の道路や、バスの後ろや横を走っている車、次の停留所や現在の時間、信号機などいろいろと考えやすいですね。その理由の一つは、知覚に働き掛けて問うからだと言われています。複数の答えから、バスの運転手さんの仕事を具体化することができます。さらにこの次の発問として「バスの運転手さんは運転している時に何を考えているのでしょうか？」と問うことで、ばらばらにたくさんあると思っている仕事の共通点を見出して、運転手さんの願いや苦勞・工夫を考えさせることができます。

この発問は、発問の名人とされている有田和正先生（筑波大学附属小学校を経て愛知教育大学教授、東北福祉大学特任教授などを歴任）が社会科の授業でされた発問として有名です。

(4) 机間指導・支援

① 一巡目は、指示通りに全員の子どもが取り組んでいるかどうか確認します。

～さっと短時間で、必ず全員の取組状況を確認します。～

② 二巡目以降は、内容に従って、観点を設けてまわります。

【観点例】

ア 支援や援助、促進

取組状況を確認し、困っている子どもに適切な支援や援助、励ましを行います。例えば、「相談させる」「手がかりを与え、気付きを促す」「参考になる意見や活動を紹介する」などが考えられます。

また、活動が早く終わった子どもには、さらなる課題や段階、仲間への手助け等を促します。

イ 情報収集・評価

発話や記述、行動などの取組状況を観察し、次の活動につなげるために、全体に紹介したい考えや方法、行動を拾います。例えば、相反する意見や考えさせたい意見を机間指導により確認し、意図的指名により取り上げ、全体の活動につなげます。

コラム

学習を思うように進めることができない子どもに支援するために、子どものそばに着いてしまいがちですが、ずっといる必要はありません。その子にとっては、分かっていないことをみんなに明かされているような気持ちになるものです。子どもの気持ちに配慮した教授行動が大切です。

(5) 意見を拾う

意図をもって、方法を選択します。

① 挙手

子どもの自発的な発言から意見を拾います

② 列指名

「この列の人は、〇〇さんから順に意見を述べてください。」と、座席順に次々と指名します。発言の機会が均等になります。広く多くの意見を拾いたいときに適します。偶然性があり、子どもにより緊張感が生まれます。

③ 話合い→代表者

話し合わせる人数や相手を、ねらいや状況に応じて選択します。生活班での話合い・同じ意見同士の話合い・ペアでの話合いなど

④ 机間指導等での見取り→意図的指名・紹介

教師の意図で、拾いたい意見を見極め、順番を考慮して指名します。考え同士を関わらせるように意図して指名します。

(6) 学習内容等の共有手段

黒板や ICT 機器などの活用により、学習の目的、内容、解決方法などの学びを仲間と共有します。

UD の「公平性」を大切にします。全ての子どもたちが認知しやすい手段を選択・活用します。

① 板書

教師が授業の柱と考える内容を残します。学びの5つの要素(何を学ぶのか・どう学ぶのか・追求や取組の経過や結果、何を学んだのか、どう学んだのか)等を中心に板書します。子どもの

〇月〇日(〇曜日) 面積

学習課題
どうすれば階段の形の面積が求められるか。

正対

まとめ
切ったり動かしたりして、長方形にすれば面積が求められる。

次図の図形の面積は何cm²でしょうか。

・長方形ではない。
・長方形が2つつながっている。
・「長ぐつ」「かいだん」に見える。

・2つに分ける。
・線を引く。
・長方形にする。

■かけ算を使って面積を求めている。
■長方形になっている。

あ: 2つの長方形に分ける。 **たて横**
① $5 \times 3 = 15$
② $3 \times 4 = 12$
①+②
 $15 + 12 = 27$

い: 2つの長方形に分ける。
① $2 \times 3 = 6$
② $3 \times 7 = 21$
①+②
 $6 + 21 = 27$

う: 動かして長方形にする。
①+②
 $3 \times 9 = 27$

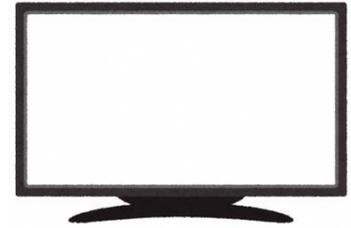
え: 長方形から出した分をひく。
① $5 \times 7 = 35$
② $2 \times 3 = 6$
①-②
 $35 - 6 = 29$

A. 27cm² A. 27cm² A. 27cm² A. 27cm²

発言や思考の変容を構造的に板書することで、子どもが学びの軌跡を確認できるよさがあります。

② 大型モニター

画像・映像等の教材や情報を即座に共有するのに適しています。提示しているものが、全ての子どもたちに見える状態になっているか確認しましょう。



③ iPad

教師と子どもの間で、あるいは子ども同士で情報を個別に共有できるよさがあります。また、必要なときに、自分で仲間の情報にアクセスすることで、自分の学びの参考にしたりすることができます。



ロイロ共有ノート、スプレッドシートなどの共同編集機能は、協働的に考えを出し合ったり、製作したりする過程も共有することができます。

④ ホワイトボード

子ども同士が、お互いの顔を見ながら話し合う活動に適しています。思いや考えを直接聞き合い、その場で反応し合いながらアイデアを書き留めるツールとして便利です。修正が簡単なので、気軽に試行錯誤しやすい特徴があります。付箋を利用するとグループ全員が意見を出しやすく、意見の整理もしやすくなる協働的なよさもあります。



(7) 学習内容の記録手段

学習内容を記録し、その記録を見返すことで理解をより深めたり、次の学習につなげたりすることができます。また、記録しながら覚えたり、考えたりすることも大切な学びです。

記録には、書く、タイピングする、写真を撮るなどいろいろな方法があります。

発達段階や目的に応じた方法を選択します。また、自分に合った方法を子どもが自分で選択できるように指導を積み重ねていくことが大切です。

① ノート

書くことで、文字を覚えたり、板書を記録したり、自分の考えを整理したりすることができます。始めは板書などをそのまま写すことから始まり、徐々に自分なりに工夫してノートをつくる力を身に付けさせていきます。低学年にノート指導をするときは、鉛筆の持ち方や何をどこに書くのかなど丁寧に指導することも必要です。特に、書くことに困難を感じている子どもには、書く内容、量やスピードに十分に配慮します。



自分なりに工夫してノートをとる力を身に付けさせるためには、個で考える時間を設定し、自分の考えをノートに書かせることから始めましょう。

② iPad

タイピングで文章を書く、身の回りの物を写真で記録する、歌やダンスを動画で保存するなど様々な学習過程を記録することができます。特に、ロイロノートの思考ツールは、考えを広げる、整理する、深めるなど思考の過程を保存できるものです。ノートアプリを使えば、写真や文字を組み合わせた表現豊かなノートをつくることができます。紙のノートを写真で記録して、仲間と共有することもで



これからを見据えて、キーボード入力の力を育成します。

③ クラウドの活用

クラウドはインターネット上にデータを保存できるサービスのことです。各種アプリで作成した文書、表、グラフ、写真、動画などは、クラウドに保存することができます。クラウド上に学習内容を蓄積していくことは、学びのデジタルポートフォリオとなり、いつでも学んだことを振り返ったり、自分の成長を実感したりすることができます。新潟市公的アカウント（～@city-niigata.ed.jp）で利用できるクラウドは、グーグルドライブ、Appleのicloud、マイクロソフトのOneDrive、ロイロノートなどがあります。たくさんのデータを精査したり、大切なデータを保存したりしていくことは育みたい情報活用能力の一つです。

(9) 実態把握

教科のねらいに対する子どもの実態を把握することです。特に、既習内容の定着状況の把握は、単元のデザインや授業の構想に大きく関わります。

実態把握の例

- ① 既習内容の定着度
- ② つまずき状況
- ③ これまでに身に付けた学習方法
- ④ 学習内容の系統性
- ⑤ 学習対象や学習内容への興味・関心
- ⑥ 学級の風土

これらを生かして、手立てを考えます。実態に応じて、単元の習得の時間と活用・探究の時間のバランスを再考する、効果的な教材・教具を準備する、学習形態を工夫する、体験活動を設定する、コース別学習にするなど、把握した実態を生かして課題を整理し、解決の手立てを考えます。

コラム 【「教師が教たいもの」を「子どもが学びたいもの」へ転換するために】

子どもが主体的に学ぼうとする原動力が必要です。

子どもが、「やってみる価値がある」「自分でできるようになりたい」「やる必要がある」という気持ちになるには、子どもの実態を把握し、教たいものと有機的に結びつけることが必要です。

「〇〇〇×□の計算をしましょう。」とするよりも「調理実習で使う材料を買いに行きます。チラシから必要な食材を選んで□人分買しましょう。」と投げかけた方が子どもに学ぶ目的をもたせます。

(10) 授業の振り返り（リフレクション）

自分の授業を改善していくには、自分の授業から学ぶことが大切です。授業を振り返って、うまくいった点、うまくいかなかった点を考えます。うまくいかなかった原因が分からないときは、AがうまくいかないからBを試してみようと代案を立てて試すなど、前向きに解決策を考えます。

このとき、「自分が子どもの立場だったら」「自分が保護者の立場だったら」と他者の視点に立つと客観的に考えやすくなります。次の日の授業で、考えた解決策の有効性や問題点を子どもの事実から捉えて、新たな問題点の解決を次に目指すというサイクルで、学び続けることが重要です。

➤ 振り返ってみましょう

- ・一点突破全面展開という言葉があります。先生なら、まず何に絞ってブラッシュアップしていきますか？よりよくするにはどうしたらいいと思いますか？

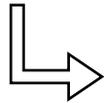
V 授業改善の視点

～考えてみましょう～

・先生が自分の授業を改善するに当たり、悩んでいるのはどんなことですか？

V-1 主体的・対話的で深い学び

(1) 授業の目的 : 資質・能力の育成



- 各教科等で育成する資質・能力
- 教科横断的な視点に立って育成する資質・能力

(2) 授業改善の視点：主体的・対話的で深い学びを単元で

主体的

子どもが学びを自分で調整する、前のめり

- 【要件】
- 魅力ある教材・問題の設定
 - 子どもに委ねる
 - 見通し (プロセス・ゴール)

対話的

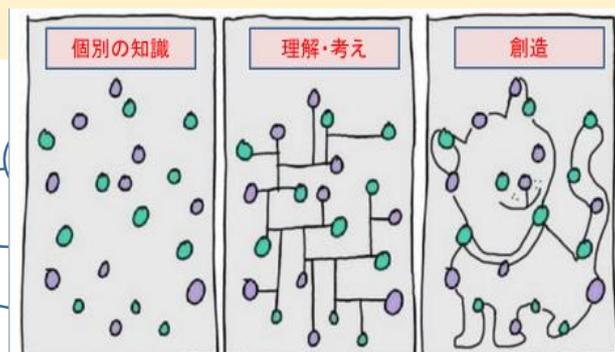
多様な他者と対話、考えを広げる深める

- 【活動】
- 交流 (情報のやりとり)
 - 検討 (最適解を見付ける・創造する)

深い
学び

個別の知識や技能を関連付ける、整理する、
理解を深め、新たな考えを創造する

- 【子どもの姿】
- 学びをまとめる、振り返る
 - 学んだことを活かして活用問題を解く
 - 学んだことを他の場面での生かそうとする

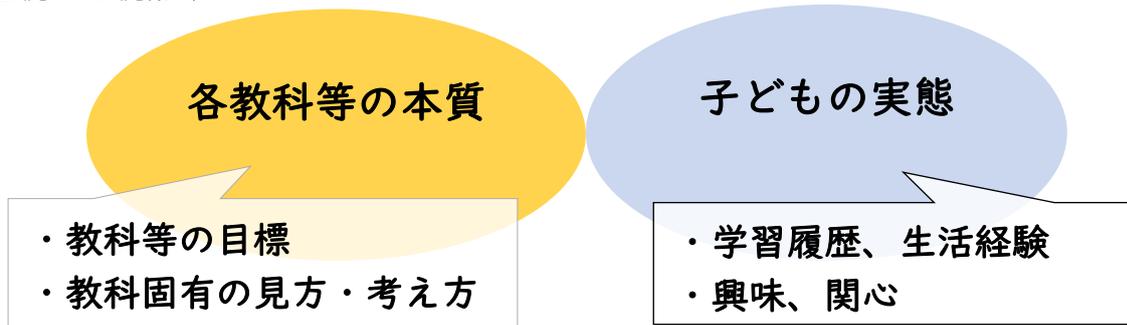


V-2 単元デザイン

(1) 単元デザインとは

単元デザインとは、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、内容や時間のまとまりを意識して、単元や題材など指導計画を創意工夫して構想することです

◆重視する視点◆



指導と評価の一体化で目指す資質・能力の確かな育成

(2) 単元デザインの必要性

学習指導要領では、育成を目指す資質・能力を確実に育むことを目指し、次のように授業を構想することが求められています

単元デザイン（単元終末の姿を意識）

そのためには、新たな単元に入る前に、まず単元の目標を確認します。その際、学習指導要領や指導書等を確認し、教科の系統性も意識しましょう。

子どもの思考の流れ、内容や時間のまとまりを意識した授業づくりへ

1 単位時間ごとの授業デザイン

(3) 単元デザインの手順

単元全体の学習活動を見通した学習過程の構想

1 単元終末の姿を想定し、単元終末までに育成を目指す資質・能力を設定します。

資・能 資・能 資・能 資・能



ゴールの姿

配慮すべき点

教科の本質と

子どもの実態を踏まえて

- ・どんなことが分かるのか
- ・どんなことができるようになるのか
- ・実生活や次の学びにどう生かすのか
- ・資質・能力の系統性

2 育成を目指す資質・能力に照らし、子どもが追求したい学習課題を構想します。

資・能 資・能 資・能 資・能



ゴールの姿

課題 課題 課題

子どもの思考の流れを考慮して

- ・各教科等に応じた単元全体を貫く学習課題
(ストーリー性のある単元構成)
- ・学習課題のつながり

3 設定した学習課題を基に、必要な学習活動と適切な教材の選定や配列を構想します。

資・能 資・能 資・能 資・能



ゴールの姿

課題 課題 課題

教材 活動 教材 教材 活動 教材

学習指導要領や教科書の

内容に基づいて

- ・価値ある活動の組織
- ・ねらいに応じた教材の選定や配列
- ・学習活動の連続性
- ・学習活動に対して保障する時間

見通す 個別最適 協働 対話 振り返る

V-3 授業づくりの要件

多様な子どもたちが、「分かった・できた、楽しい」と思える授業づくりの基本的な考え方として、1時間の授業で求めたい子どもの様相を、常に念頭に置きましょう

(1) 授業のねらいの明確化

各教科の目標や見方・考え方、単元の目標・教材に基づいた本時のねらいを子どもの姿として設定する。

(2) 1時間の授業で求めたい要素・子どもの様相

「何を学ぶのか」

課題やめあてを全ての子どもが自覚する。

「どう学ぶのか」

全ての子どもが見通しをもつ。

「追求・取組」

学習環境や活動、教材、支援のもと、個人で、または仲間と取り組む、追求する。

「何を学んだのか」

獲得した知識・技能や見方・考え方等を全ての子どもが自覚する。

「どう学んだのか」

追求過程や成長、学習の価値を全ての子どもが自覚する。

(3) 児童生徒理解と教授行動・授業技術

- 子どもの興味・関心や学習の履歴、進度、習熟度に関する理解
- 「指示・説明」「視覚支援」「机間指導・支援」「称賛」
「意見を広げる・収束する」等

V-4 確かな学びの5つの要素

これまでの強み

5つの要素のつながりを意識して、様々な授業づくりを構想することができます。



基本的な
フレームワーク

学習対象との
出会い

学習課題

追求活動

まとめ

振り返り

5つの要素を含んだフレームワークのよさ

○ 子ども自身が本時の学習内容を自覚できる

何を学んでいるのか
どのように学んでいるのか
何がわかり、できるようになったのか、分かる！



○ 見通しがもてることの安心感

次は、個人で追求して、友達と……だな



Point



「学習課題」の設定と「まとめ」「振り返り」の位置付けは、常に1時間の中におさめるわけではありません。この「学習課題」「まとめ」「振り返り」を形式的に取り入れるのではなく、1時間あるいは単元の中に適切に位置付くよう、学習の展開によって、弾力的に活用していくことが必要です。

(1) 「学習課題」「まとめ」「振り返り」

授業を構想する際は、次の目的をおさえることが大切です。



【学習課題】 「何を学んでいるのか？」

- ▶ 子どもが「追求したい」と自覚する

【まとめ】 「何がわかり、

できるようになったのか？」

- ▶ 子どもが追求の結果、「学んだ」と自覚する

【振り返り】 「どのように学んでいるのか？」

- ▶ 子どもが「価値がある」「成長した」と自覚する

① 「学習課題」構想のポイント

ア 新潟市が大切にしてきた「学習課題」とは…

「学習集団の全体の問い」 「個々の問いの集合体」

イ 優れた「学習課題」

【内容性】 子どもが追求する内容が、学習指導要領に示されている内容や単元のねらいと的確に対応している

【情意性】 子どもが、追求する内容に対して必要感や興味・関心をもっている

【集団性】 一人一人の子どもが、仲間と追求することへの意欲をもっている

ウ 「ずれ」を生かす学習課題設定

【自分自身とのずれ】

既に子どもが持っている日常生活や学習場面での経験や、知識等を基にして感じる意外性

【他者とのずれ】

提示されたモデル等や友達の様子・考え方等を基にして感じる意外性

あれ？前の時間とは違う…！どうすればいいんだろう？

すごい！あんな風にやってみみたい！どうやったら…？

みんなの疑問をまとめると？

あれ？自分が思っていたことと違う！どうしてかな？

いくつかの意見があるんだなあ！最も…なのはどのようものかな？



② 「まとめ」のポイント

- 全員が、何を学んだのかを自覚させるために、追求過程で学んだことを子どもたちに俯瞰させ、学習課題に正対した答えの形でまとめます。
- 以下の内容を、言葉で表現します。
 - ア 明らかになった「見方・考え方」や「知識・技能」など
 - イ 追求過程を踏まえ、考え、判断した結果など

まとめへの働き掛け（例）

Step 1： 何について学んだのかを確認する。

今日は、学習課題『○○だろうか？』に対して、○○などの活動をしました。この問いに対するまとめは、どのようなことが言えるでしょうか。



Step 2： 学んだことや明らかになったことを引き出す。

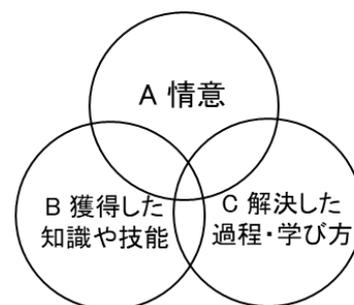
例

追求（活動）してきた結果、

- ① 共通していることは何ですか？
- ② 全てのことに関連していることは何だと言えますか？
- ③ どのようなきまりや法則があると言えそうですか？
- ④ どのようにすれば問題が解決しやすくなると言えますか？
- ⑤ 最終的な意見や考えを書きましょう。

③ 「振り返り」のポイント

- A 学びを通じた情意面の変化について振り返る
- B 獲得した知識や技能について振り返る
- C 解決した過程・学び方など、学びを自己調整したことについて振り返る



留意点

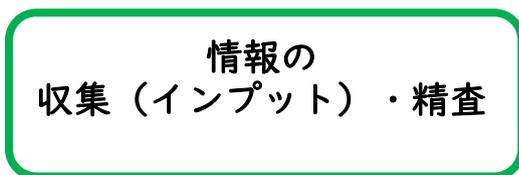
- 意図的・計画的な振り返りを心掛けましょう。
- 特にCを含んだ「振り返り」で身に付けた学びは、様々な場面で活用できる力を身に付けることにつながります。
- 参考になる「振り返り」をモデルとして紹介し、イメージさせましょう。
- 適応問題をさせることもあります。



(2) 追求活動の中で大切にしたい視点



追求活動では、アウトプットに重点を置くことで、子どもが主体的に自分の考えを広げ深めることを目指します。



考えを形成するための情報を集めたり、思考ツールやワークシートなどを利用して、情報を整理・分析したりします。教師は、様々な情報源にアクセスできる環境を整えたり、提示したりします。

例：教科書、図書資料、新聞、実験観察、インタビュー、インターネット



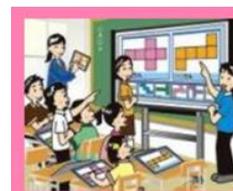
情報収集した知識や既存知識と関連付けて、子どもが獲得した知識や考え方を自分の方法や自分の言葉や図、身体、音楽、造形等で表現します。

これにより、考えが整理されたり、理解が深まったりして、よりの学びの定着が図られます。



考えの形成

他者と交流・検討・練り上げ等が行えるようになります。これにより、インプットとアウトプットが繰り返され、考えや理解が広がったり、深まったり、創造できたりします。個人内での対話、他者との対話、対象とのかかわりを通じた気づきなど、かかわりを通じた学びとなるようにすることが大切です。



グループや学級全体での発表・話し合い



複数の意見・考えを議論して整理



遠隔地や海外の学校等との交流授業



グループでの分担、協働による作品の制作

V-5 個別最適な学びと協働的な学びの 一体的な充実

これからの視点

(1) 今日の学校教育が直面している課題

子どもたちの多様化

児童生徒の学習意欲の低下

「正解主義」や「同調圧力」からの脱却



「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（中教審第228号）より

(2) 「自分らしさ」を発揮する2つの学び

個別最適な学び

子どもが自己調整しながら
学習を進めていく



「〇〇について考えていこう」
「この方法で進めていこう」
「この見通してやっていけそうだ」

協働的な学び

異なる考え方が組み合わせり、
よりよい学びを生み出す



「〇〇さんと〇〇さんの意見は似ているね」
「〇〇さんの考えに付け足すと…」
「□□だったら、こんなことができそう」

(3) 個別最適な学びの2つの視点

指導の個別化 【主に基礎・基本】

- ・ 支援の必要な子どもに重点的な指導を行う。
- ・ 特性や進度、到達度に応じ、学習方法・教材・
 ◇ 時間等、柔軟に提供・設定する。

学習の個性化 【主に探究・発展】

- ・ 個々の子どもの興味・関心に応じて、学習を進める。
- ・ 課題や学習活動に取り組む機会を提供する。

(4) 個別最適な学びを実現する考え方

Key Word 教師：選択肢の提供 子ども：自己決定・自己選択

学習の主体
は子ども！

学習方法

		教師	子ども
課題・ 内容 <small>テーマ 対象 めあて</small>	教師	課題・内容と学習方法を 教師が示す  A	課題・内容を教師が示し、 子どもが学習方法を 選択・決定する  B
	子ども	学習方法を教師が示し、 課題・内容を子どもが 選択・決定する  C	課題・内容と学習方法を 子どもが選択・決定する  D

- A～Dは、授業改善を図っていく上での順序性を表しているわけでは、決してありません。単元の特性やねらい、子どもの実態に応じて、適宜取り入れていくためには、どれも必要な指導、支援です。

学習方法

		教師	子ども
課題・内容 テーマ 対象 めあて	教師	課題・内容と学習方法を 教師が示す  A	課題・内容を教師が示し、 子どもが学習方法を 選択・決定する  B
	子ども	学習方法を教師が示し、 課題・内容を子どもが 選択・決定する  C	課題・内容と学習方法を 子どもが選択・決定する  D

A

教師が授業の大半を主導する一斉的な指導です。子どもを見取りやすく、学級全体を着実にゴールに導きやすいよさがあります。

学習方法

		教師	子ども
課題・内容 テーマ 対象 めあて	教師	課題・内容と学習方法を 教師が示す  A	課題・内容を教師が示し、 子どもが学習方法を 選択・決定する  B
	子ども	学習方法を教師が示し、 課題・内容を子どもが 選択・決定する  C	課題・内容と学習方法を 子どもが選択・決定する  D

B

子どもたちに、学習方法・教材・時間等の選択肢を提供し、自己決定させます。特性や進度、到達度等の個人差に応じる支援です。特に基礎基本等の指導・支援に効果が期待できます。

学習方法

		教師	子ども
課題・内容 テーマ 対象 めあて	教師	課題・内容と学習方法を 教師が示す  A	課題・内容を教師が示し、 子どもが学習方法を 選択・決定する  B
	子ども	学習方法を教師が示し、 課題・内容を子どもが 選択・決定する  C	課題・内容と学習方法を 子どもが選択・決定する  D

C

子どもたちに、課題や内容（テーマ・対象・めあて等）を自己決定させます。興味・関心に応じることで、追求意欲を喚起したり、学習への主体性を育んだりすることが期待できます。

学習方法

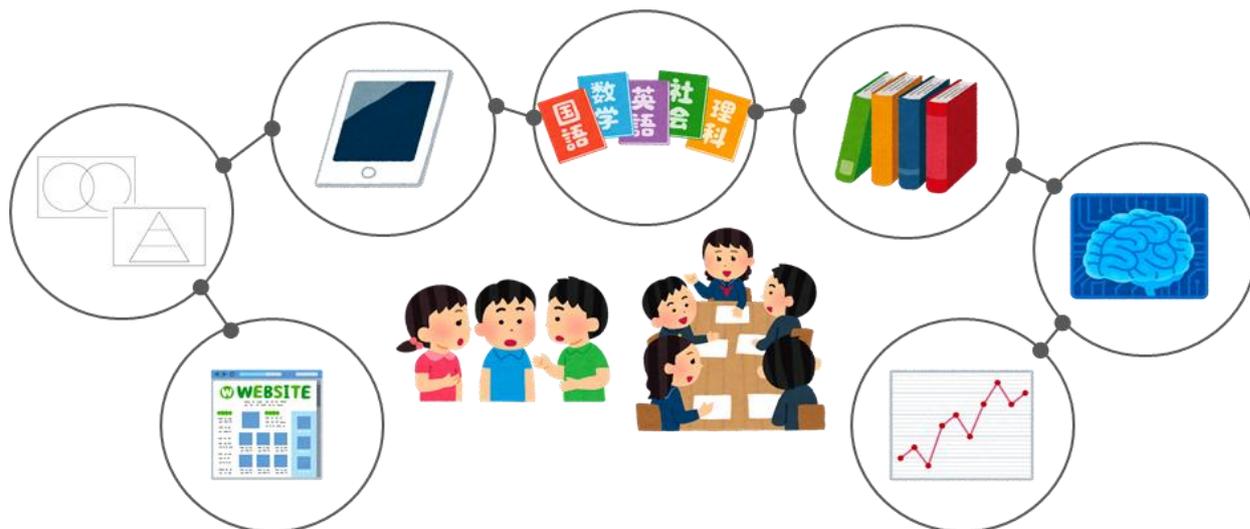
		教師	子ども
課題・内容 テーマ 対象 めあて	教師	課題・内容と学習方法を 教師が示す  A	課題・内容を教師が示し、 子どもが学習方法を 選択・決定する  B
	子ども	学習方法を教師が示し、 課題・内容を子どもが 選択・決定する  C	課題・内容と学習方法を 子どもが選択・決定する  D

D

課題や内容、そして方法も子どもに委ねることで、子ども自らが学びの主体者として、資質・能力が育まれていきます。特に、探究や活用場面で効果が期待できます。

- 学習改善を図るためのA~Dの指導・支援それぞれに、協働的な学びが存在します。教科のねらい、子どもの実態や発達段階に応じて、単元内に柔軟に取り入れる視点をもつことが大切です。

(5) 協働的な学びとの一体的な充実を目指して



- 一人一人の「自分らしさ」を生かしながら、他者との協働的なかわりを通して学ぶことにより、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びが生まれます。

(6) 「5つの要素」とのつながり

- 5つの要素それぞれに、学習改善を図るための指導、支援のA～Dが含まれます。学習対象と出合い、学習課題を子ども自身が選択・決定したり、追求活動での学習方法を子どもが自分に合う方法を選択・決定したりするなどの展開が考えられます。



➤ 振り返ってみましょう

- ・授業改善の視点で、これから取り組んでみたいと思ったことはどんなことですか？

VI 情報活用能力の育成

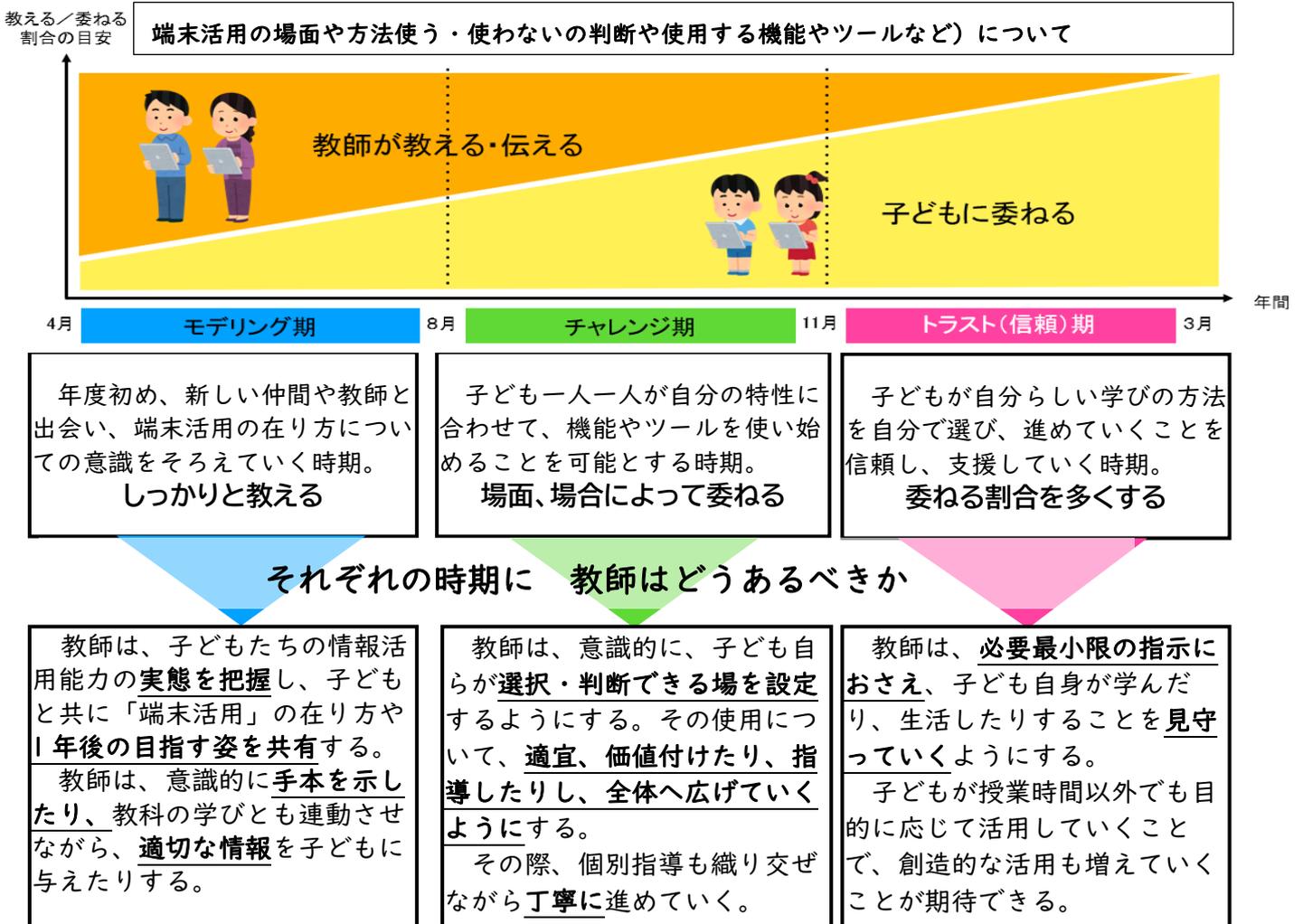
～考えてみましょう～

- ・情報活用能力と聞いて、どのような力が思い浮かびますか？
- ・先生が情報活用能力の育成を図っているのは、どのような学習場面ですか？

情報活用能力は、教科を越えた全ての学習の基盤として生まれ活用される力の一つです。情報活用能力のほかにも言語能力、問題発見・解決能力等が挙げられます。情報活用能力は、将来の予測が難しい社会において、情報を主体的に捉えながら、何が重要かを主体的に考え、見いだした情報を活用しながら他者と協働し、新たな価値の創造に挑んでいくために重要な資質・能力です。

VI-1 情報活用能力を育成する基本的な考え方

<年間の見通しをもって、教える割合を減らし、委ねる割合を増やす>
 自立した学習者を育てるため、目の前の子どもの発達段階、実態に応じて、下図のイメージで、子どもに委ねる割合を増やすことが大切です。



VI-2 育成を目指す情報活用能力とは

① 情報を集める力



ロイロ「共有ノート」上で
友達の考えを自由に参照し
ながら、自分のペースで学
びを進めています。



自分で調べて、選択したイ
ラストを使って、作品のイメ
ージを膨らませて作成して
います。

② 情報を整理・分析する力



デジタル思考ツールで考え
を整理しています。思考ツ
ールを自己選択できる力も
育みます。



クラウド上にあるデジタルデ
ータを自己選択し、必要な
情報を取り出し、活用でき
る力を育みます。

③ 情報を伝える力



発表ツールを自分で選択
し、共同編集機能で、試行
錯誤しながら、スライドを
共同製作しています。

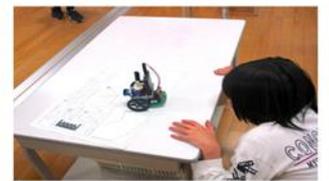


Googleスライドで、課題や
解決過程を互いに共有しな
がら、協働的に学びを進め
ています。

④ プログラミングの能力



micro:bitを活用し、コン
ピュータに意図した処理を
行わせるために必要な論理
的思考力を身に付けます。



身近な問題の解決に主体的
に取り組む態度を育成する
ために、実際にプログラミ
ングを体験します。

⑤ 操作する技能

国で議論が進められている学力調査や大学入試
のCBT化に対応できる**ハードウェアキーボード
による文字入力**を意図的に取り入れましょう。

【1分間あたりの文字数】

高等学校 60字以上

中学校 50字以上

小高学年 40字以上

小中学年 20字以上

小低学年 簡単な文



ローマ字表を見ながらタイピング (小2児童)

⑥ 情報モラル・デジタルシティズンシップ



家庭学習の計画や学習時
間をGoogleカレンダー
やアプリで自覚し、自己
調整しています。



チェック表で自分の取組
を振り返り、見通します。

1時間の授業だけでなく、各教科や単元を通して育むことが大切です。

VI-3 情報活用能力を発揮しながら学ぶ 自立した学習者のイメージ

<個別最適な学びの視点>

★ デジタル思考ツールの選択・活用

- 教師の指示で活用できる。
- 自分に合った思考ツールを活用できる。

★ デジタル教科書・教材の選択・活用

- デジタル教科書・AIドリル等を自分の実態に合わせて進めている。
- AIドリルの個人カルテ機能、自分の学びを調整している。

★ 学び方を支えるツールの選択・活用

- タイマーを使って、自分の学習時間を管理している。
- カレンダーアプリで、計画を立てて学習している。

★ 特性に応じたツール・機能の選択・活用

- アクセシビリティ機能（拡大鏡や機能等）を活用している。
- アプリカタログのアプリを自由に活用している。

★ 学習過程に応じたツールの選択・活用

- 「課題設定」、「情報収集」、「整理分析」、「まとめ・表現」、「振り返り」等、学習過程に合ったアプリケーションを選択・活用している。

★ デジタルポートフォリオを用いた学びの改善

- ロイロノート等で、生活や授業を振り返り、生かそうとしている。
- キャリアパスポートを用いて、自らの学びを振り返っている。



どの学年でも、
発達段階や個人の
特性に応じて、
繰り返し指導する



<協働的な学びの視点>

★ 他の人への貢献を考えた活用

- 進んで自分の知っているよい機能やツールの使い方を紹介している。
- 機能面で困っている友達にやり方を教えるなど、進んで助けている。
- 不適切な使い方をしている人に助言するなど、共によりよく端末を使おうとしている。

★ 協働的に課題解決するための活用

- ロイロの共有ノート、Apple フリーボード等、共同編集・共同制作機能を活用し、協働して課題解決している。
- 友達と使用アプリを分担してアプリやツールを選択・活用し、協働して課題解決している。

★ 考えを共有するための活用

- ロイロノートや Google Workspace、Teams、Zoom 等で、友達の意見や成果物等を参考にしながら、自らの考えを練り上げている。

VI-4 情報モラルを高めている学習者のイメージ

情報モラル指導を通して目指す姿

下の5つで示しているのは、情報モラル指導を通して育成を目指す姿のイメージです。

子どもの実態に応じて、「今はどの程度のレベルなのか」「特に育成すべき項目はどれか」を考慮し、デジタル・シティズンシップの考え方も取り入れながら、発達段階に応じて子ども自身に考えさせて繰り返し指導していくことにより、デジタル社会に対応し、情報を適切に活用して生き抜いていく資質・能力を高めていくようにします。

	Lv.1	Lv.2	Lv.3
コミュニケーションと責任	オンライン上でのいじめや悪口にはどのようなものがあるか知っている。	オンライン上のやり取りとリアルなやり取りの違いを知り、意識している。	オンライン上でのいじめ行為も現実世界と同じように許されないことだと理解し、行わない。
ルール・マナーを守る	デジタル空間のコミュニティに誰が参加しているのか知っている。	情報の保護について考え、聞かれてもよい質問と聞かれたら困る質問を判断し、答えるかどうか決めている。	違法な行為とは何かを考え、発信した方がよい情報、してもよい情報、しない方がよい情報、してはいけない情報を理解し、情報発信を行っている。
健康と安全	iPad を使わない時間と場所が分かり、決めた約束を守る。不適切な情報に出合った時は大人に相談している。	自分がどのメディアをいつ、どのくらいの時間使ったか分かり、振り返る。不適切な情報であるものを認識し、対応できる。	自分に合ったメディアバランスの計画を考え、実行している。ウェブサイトでの安全な行動を行うことができる。
情報セキュリティプライバシー	個人情報には何があるか知っている。	個人情報と非個人情報の違いを知り、公開してもよいもの、してはいけないものを決めている。	個人情報を他の人に知られないようにするためにはどうするとよいか分かり、実行している。
公共性への自覚	情報源が信頼できるかどうか判断する基準（制作者、タイトル、ウェブサイトなど）を知っている。	情報には著作権があることを理解し、正しく引用・利用している。	複数のメディアや情報源から得た情報を批判的に検討し、正しいものを選択・活用している。

VI-5 情報スキル・プログラミング能力目標体系表

学校種 学年	情報スキル			プログラミング能力
	A タイピング	B 操作	C 情報資源活用	D プログラミング
高等学校	<input type="checkbox"/> 1分間に60字以上	<input type="checkbox"/> アプリケーション、システム、デジタルの特徴を理解し、適切にカスタマイズして活用できる。	<input type="checkbox"/> 目的に応じて、より効果的に施設や資料を活用する。	<input type="checkbox"/> 変数を使ってプログラムを作成することができる。 <input type="checkbox"/> 関数を使ってプログラムを作成することができる。
中学校	<input type="checkbox"/> 1分間に50字以上	<input type="checkbox"/> 容量を考えながら、ファイル管理ができる。 <input type="checkbox"/> 操作についての不明点を自分で解決できる。	<input type="checkbox"/> 目的に応じて施設を利用する。 <input type="checkbox"/> メディアの種類や特性を生かして活用する。 ・出典、アドレス、著作権、引用、要約、要旨、情報の選択、評価	<input type="checkbox"/> 目的に応じて、順次・分岐・反復を使ってプログラミングができる。 <input type="checkbox"/> 目的に応じて、フローチャートを作成し、修正することができる。 <input type="checkbox"/> プログラムの不具合から、修正箇所を見つけることができる。
小学校 高学年	<input type="checkbox"/> 1分間に40字以上 <input type="checkbox"/> 全角・半角・英字・数字・記号などを使い分けて入力できる。	<input type="checkbox"/> 目的や場面に応じて、アプリケーションを選択、組み合わせ活用ができる。 <input type="checkbox"/> クラウドの基本が分かり、データの保存・管理ができる。 <input type="checkbox"/> 表計算の基本機能が分かり、使える。	<input type="checkbox"/> 多様な公共施設やメディアの特性を知り、選択・活用する。 <施設>図書館、博物館、美術館等 <資料>年鑑、統計資料、年表、新聞等 ・日本十進分類法 ・奥付、著作権、要旨情報の整理、図示	<input type="checkbox"/> 簡単な反復処理のプログラミングができる。 <input type="checkbox"/> 簡単な分岐処理のプログラミングができる。 <input type="checkbox"/> 簡単な分岐処理のプログラムをフローチャートに表すことができる。
小学校 中学年	<input type="checkbox"/> 1分間に20字以上 <input type="checkbox"/> ローマ字で正確に入力できる。	<input type="checkbox"/> 各種アプリケーションで、共同編集機能を用いて学習できる。 <input type="checkbox"/> Google Workspaceの基本機能を使える。	<input type="checkbox"/> 公共図書館の利用方法を知り活用する。 ・分類、ラベルの見方 ・国語辞典、漢字辞典、百科事典 ・出典、引用、要約、情報の分類 ・iPadでの電子書籍の借り方	<input type="checkbox"/> 簡単な順次処理のプログラミングができる。 <input type="checkbox"/> 情報処理の手順を図で表すことができる。
小学校 低学年	<input type="checkbox"/> IDとパスワードの入力 <input type="checkbox"/> 簡単な文が打てる。 <input type="checkbox"/> タイピングに親しむ。	<input type="checkbox"/> コンピュータの簡単な操作ができる。 <input type="checkbox"/> 写真や動画の撮影ができる。 <input type="checkbox"/> ロイロノートの基本機能の活用できる。	<input type="checkbox"/> 学校図書館を利用する。 ・図書館のきまり ・レファレンスサービス ・図鑑 ・目次、索引、書き抜く、情報の読み取り、情報の比較 ・iPadでの図書館蔵書検索の仕方	<input type="checkbox"/> 身近な生活でコンピュータが利用されていることを知っている。 <input type="checkbox"/> 簡単なプログラミング的な考え方が使える。

➤ 振り返ってみましょう

- ・情報活用能力の育成として、これから取り組んでみたいと思ったことはどんなことですか？

【指導案作成の目的】

- 1 授業者が、単元や本時の目標やねらいを確認し、単元の構想や本時の指導案をたてるため。また、そのことで**授業・単元のデザイン力**をつけていく。
- 2 授業者が、自校の研究に沿った授業づくりを考えるため。
- 3 事前検討や協議会において、単元や本時の指導について、協議や検討したりしやすくするため。

【指導案の形式】

- 1 単元の構想、本時の指導の概略がわかるもの。
 - 2 上記の「作成の目的」が達成されれば、各校の実態に応じたものでよい。
 - 3 下記の例を参考にしてもよい。
- ※ 単元に入る前に、単元の指導を構想していることこそ自体が大切です。

新潟市立〇〇（小・中・高等）学校

第〇学年〇組 〇〇科 学習指導案

令和〇年〇月〇日（曜）第〇校時

（〇：〇〇～〇：〇〇）

指導者 教諭 〇〇 〇〇

1 単元（題材）名 「〇〇〇〇〇〇」

- ・単元名を記述します。
- ・単元が大きな教科の場合、小単元で記述することも可能です。

2 単元（題材）の目標

- 【知識及び技能】
- 【思考力、判断力、表現力等】
- 【学びに向かう力、人間性等】

- ・児童生徒の実態を踏まえ、学習指導要領に記載されている目標や内容を基に単元で目指す姿を資質・能力ごとに設定します。

3 単元（題材）の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
.....
.....
.....

- ・単元の評価規準は、学習を通して身に付けるべき資質・能力を明確にし、「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料を参考にしながら、各観点に即して設定します。右の二次元コードからダウンロードできます。
<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryoku.html>
- ・各観点の評価規準の数は、1～2程度に精選しましょう。文末は基本的に「～している」、主体的に学習に取り組む態度は「しようとしている」となります。



4 単元と指導の構想

- ・単元目標に向かい、どのように主体的対話的で深い学びの実現に迫るのか、ICT活用を含め、授業者の手立てや工夫について記述します。

5 単元の指導計画（全〇時間）

時	学習のねらい（○）と主な活動内容（・）	評 価		
		知	思	態
1	<例> ○（小数）÷（整数）の式の意味を理解する ・文章題を読む		○	

- ・規準を満たしている児童（生徒）の様子を具体的に記述します。
- ・学習指導要領の指導事項との対応を記号で記述します。

	<ul style="list-style-type: none"> ・課題をつかむ ・自分なりの考えで問題を解く 				
2 本 時	<ul style="list-style-type: none"> ・本時は太枠で囲みます。 				
	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の目標達成のために学習活動をどのように構成していくのか、追究課題をどのように設定していくのかを検討します。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元全体を通して、各観点のバランスを考慮し、指導に当たることができるようにします。 ・1時間の授業で評価する観点は1～2に絞り、指導の重点化を図ります。 			

6 本時の計画 (○時間目/全○時間)

(1) 本時のねらい

<例> ○○について①、△△することを通して②、□□することができる③。

- ・単元の目標を具体化し、この授業を終えた時に児童(生徒)がどのような姿になることが望ましいのか、どのような力が身に付いていけばよいのかを記述します。
- ◇ 「○○について①」は、本時の学習内容や学習課題などについて記述します。
- ◇ 「△△することを通して②」は、目指す姿にするための活動や手立てを記述します。
- ◇ 「□□できる③」は、本時で目指す児童(生徒)の姿を記述します。

(2) 本時の構想

- ・ねらいの達成に向けて、具体的な手立てや指導上の留意事項を記述します。

(3) 本時の展開

学習活動	教師の働き掛けと予想される児童生徒の反応	■評価規準(観点/方法)・○留意点
導入 1。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容、教師の働きかけ、児童(生徒)の反応について記述します。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ○ ・指導上留意する点について記述します。 ☆ ICTの活用についても簡潔に記述する。
展開 2。	<ul style="list-style-type: none"> ・児童(生徒)が主語になります。問題解決的な学習過程で、どんな活動を行うのかを、「1...する。」のように活動内容に番号を付けて記述します。 ・各学習活動にかかる時間を記述します。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ○
終末 3。		<ul style="list-style-type: none"> ■ ■

- ・評価規準を書きます。その際、何に基づいて評価するかも記述します。

(4) 評価 (展開の「■評価(観点/方法)・○留意点」に沿って記述)。

- ・ねらいを達成した姿を、「おおむね満足できる状況(B)」について具体的な児童(生徒)の姿として記述します。
- ・何に基づいて評価するかを記述します。評価の観点は括弧内に記述します。